格闘少女サキ　悪夢の奴隷調教

シラオカ

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。

このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】

格闘少女サキ　悪夢の奴隷調教

【Ｎコード】

Ｎ４１１６ＩＰ

【作者名】

シラオカ

【あらすじ】

水野（みずの）　沙希（さき）は空手部の所属する、高校入りたての１５歳。

しかし、空手部は乗っ取られ、沙希は男達の性処理用の奴隷にされてしまう。

★：挿絵あり

０１　悪夢の前　【複数輪姦】★

＜i830259―43402＞

その日の道場は、ひときわ大きい叫び声が響き渡っていた。

「おらぁ！沙希ぃ！男の強さが理解できたか！」

３人の男に囲まれた少女は、全身に打撲を受け、既に意識も途切れ途切れだ。

道着は乱れ、少女の胸と尻は無様に晒されている。意図的に下着を剥ぎ取られていることから察するに、衣類の乱れは、そういうことなのだろう。

少女はこのまま気を失えれば、少しは楽になれるだろう。しかし、意識が飛びそうになると、男達はそれを察知し、少女の敏感な突起を強く引っ張り、呼び戻す。

「あぎっ！いぎゃあ！！」

「ほらほら、沙希ちゃん。気絶してたら、伝統ある空手部が消滅しちゃうよ！」

満身創痍だった少女の身体が、凄まじい悲鳴と共にビクンと跳ね上がる。

「オラァ！しゃぶれや！まだ反抗するなら、マ◯コに拳をブチ込む

ぞ！」

「は、は…い…」

ゼイゼイと息をしながら、眼前に出された男根に、少女は可愛らしい唇を寄せる。

「ん…く、んぷ…」

男の亀頭部分を咥え込んだ少女に、もうひとりの男が少女の前の穴に突き刺していたペ◯スを激しくピストンする。

「んくっ！んぐ…ふっ…くぅ」

少女はまた、意識が飛びそうになる。
薄らぐ意識の中、何故、自分がこんな目に遭っているのか、走馬灯のように思い出すのであった…

◇◇◇

水野沙希（みずのさき）は、今年、八海山高等学校に入学したばかりの１５歳の少女だ。

実家が空手道場ということもあり、幼少より武道に精通し、親の血であろうか、素質もあった。

ある高校の空手大会を親に連れられ観戦したとき、弱小ながら必死で闘う八海山高校に目を奪われ、それはやがて、沙希の目標となった。

「八海山高校の空手部を優勝に導きたい」

大きな目標を胸に、沙希は実家から遠く離れた八海山高校空手部に入部する。

空手部の部員たちは彼女を歓迎し、弱小で部員も減り、廃部寸前だった空手部は息を吹き返すかに見えた。

しかし、彼女が入部して間もなくのことだった。

「空手部と拳法部を、統廃合する」

学校側の考えとして、似たような2つの部なので、一本化することでスリム化しようということだった。

そして、空手と拳法のどちらの看板を残すかは、双方の話し合いで決めてほしいとの、学校側からの通達があったのだ。

そこで、どちらを残すかは試合で決めることとなったのだが、ここで空手部は拳法部に、大いに苦戦することとなる。

拳法部は卑怯にも、空手部の先鋒に中堅、次鋒に副将をぶつけてきたのである。

部員不足の空手部は、新一年生でも選手になれた。そこを突かれたのだ。まだ突きもまともに打てない二人は当然のように負け、一気に窮地に立たされる。

そして、中堅である沙希に対するは、拳法部の主将にして大将の鬼村（きむら）だ。

長身でイケメン、そして路上喧嘩で慣らした彼に対し、果敢に立ち向かう沙希だったが、健闘虚しく、倒されてしまう。

「水野とか言ったっけ？1年にしちゃ、やるじゃん」

鬼村は倒れた沙希を、思い切り蹴り上げる。

「ぐはっ！」

続けて踵を打ち降ろし、蹴り、踏みつけ、彼女から一切の抵抗力を奪う。

（な、なんて奴…、無抵抗の、人間に…ぐぅっ）

空手部の主将と副将が驚いて、止めに入ろうとする。

しかし、いつの間にか武器を携えた拳法部の４人により、あっさり鎮圧されてしまう。

「おし、長井、稲村、草凪。こいつ好きにしていいぞ。加藤は見張っとけ」

鬼村がドカリと座り込むと、入れ替わるように３人の男が沙希を囲む。

（え…、なに？好きに…って、わた…し…）

そして、朦朧とする意識の中で彼女は純血を散らすとともに、自分の夢も大きく汚された。

<i8133365-43402>

０２　敗北と屈服【複数輪姦】★

空手部と憲法部の存続を賭けた試合から1週間後…

拳法部に大敗を喫した空手部は、拳法部に統廃合されると思われた。

だが、実際は拳法部が空手部に吸収される形となった。

◇◇◇

空手道場からは、かつての活気ある掛け声は聞こえない。代わりに響くのは、ぬちゃぬちゃと液体が粘り付く淫靡な音と、少女の叫声だ。

「よかったな、沙希ちゃん。大好きな空手部が消滅しなくて…」

「ん…んちゅ…、ぷは…、あ、有難う御座います…」

沙希は、四つん這いになって、加藤のペ◯スをしゃぶっている。

沙希を中心に４人の男が股間を剥き出しにして囲っている状況は、あまりに異常だった。。

＜:i８１８０９９―４３４０２＞

「おーい、次はこっち。２秒以内！」

沙希は急いで身体の向きを変えると、加藤の隣りにいる稲村のペ◯

スを、亀頭をすっぽり包むように口に含める。

「おら！こっちもだよ！早く！」

「んぐ、は、ふぁい…」

ペ◯スを口に含んだまま、沙希は両手を床に着け再び四つん這いになると、後ろから怒鳴る長井に、尻を高く上げて答える。

既に何度もペ◯スを受け入れてグズグズになった沙希の秘部に、そそり立つ怒張が突き立てられる。

「ふ…ふぐぅ！」

長井の乱暴なピストンは、つい先日まで処女だった沙希にとって、苦痛以外の何物でもなかった。

「く…んぐ、むぶ…」

「お、おい。歯を立てるなよ…てか、長井さん、ちょっと、ストップ、ストップ…」

長井は動きを止めようとせず、身の危険…いや性器を噛み切られる危険を察知した稲村は、慌てて彼女の口からペ◯スを引き抜く。

その瞬間、沙希の歯が稲村のカリ首を引っ掛けた為、その刺激で稲村のペ◯スは絶頂に達する。

ドプ…ドピュ、ドピュル…

勢いよく放った精は、沙希の顔に勢いよく浴びせ掛ける。

沙希は一瞬顔を背けるも、顔を拭う余裕もなく、その右手を草凪のペ◯スにかけ、しごき始める。

（く…、何故、わたしは…こんなことに…なっているの？）

◇◇◇

試合に敗北し、無惨なレイプを受けたあの日…

「おい、水野…。せっかくだし、空手部を残してやろうか？」

男達から開放され、呆然と虚ろな目で天井を見つめる沙希に、鬼村はそう提案する。

「なんだ、空手部を優勝に導くのが夢…だっけ？」

沙希は「う…あ…」としか答えられないが、その内容は伝わっているようだ。

「だったら、俺等が出れば、かなりいい線行くと思うぜ。少なくとも、今の空手部よりはな…」

（ゆ…優勝…、今の…弱い…、何を…言って…）

沙希は朦朧とした意識の中、既に夢も尊厳も崩された今、優勝になんの価値があるだろう…。

（確かに、こいつら…強い…、けど…）

沙希はうずくまったまま、何も言えずに考える。
いや、結論は出ている。
（だ、誰が…、お前達なんか…に…）
そう言い返したい沙希だったが、絞り出そうにも声が出ない。
少し考えた鬼村は、おもむろに気を失っている空手部主将の前に立つ。そして、タンタンと軽くスキップしたと思うと、彼の腕に目掛けて、強烈な蹴りを入れる。
バキャッ！
骨の折れる音と同時に、主将の叫び声が、道場に反響する。
「ギャアアア！」
主将の悲鳴に、朦朧とした意識が一気に覚醒する沙希。
（な…なんてことを！）
沙希の表情と反対に、鬼村は淡々と返す。
「夢、諦めるんなら、不要だろ？お前も腕出せよ、折ってやるからよ…」
沙希は思わず腕を守る。
「ま…待って…。分かったわ、言うことを、聞く…だから…」

絞り出すように言葉を出す沙希に、鬼村は気怠そうに返す。
「ちげーよ、お前がお願いするってのが、流れじゃねーの？」
沙希は、悔しそうな気持ちを押し殺して、鬼村に頭を下げる。
（い、今は…、主将を、早く病院に…、私のせいだ。私が返事を躊躇したから…）
自責の念からか、沙希は、屈服の言葉を口にした。
「お、お願いします…、私の夢を…、空手部を、優勝させて下さい…」
ニヤリと笑い、沙希の頭を踏みつける鬼村。
「いいぜ、その代わり、お前は新生空手部のマネージャーに降格な」

０３　寮から奴らのアパートへ引っ越し①【脱衣】★

土曜日の正午。

古びた２階建てのアパートに、沙希は大荷物を持って、訪れた。

鬼村の親が副業で不動産を手掛けており、この安アパートの管理を、子息である鬼村に任されているらしい。

「今日からここに住めよ。部員の健康管理とかも、マネージャーの仕事だろ？」

という強引な論法で、沙希は寮からこのアパートへ移されることになった。

部屋は３畳ほどの広さで、ベッドと小さな引き出しを置くと、もう動き回るスペースも無い。

（狭くて汚くて…なんか臭い…）

まるで独房のような居室に、沙希は思わず気を失いそうになる。

<:i816114―43402>

建物は一軒家を改造した風で、玄関から入ると一階は共同リビング、共同トイレ、共同風呂となっている。

２回は居室が８つほどあり、他の入居者は殆ど居ない。

こんな環境なので、殆ど拳法部の集会場のようになっている。たまに入居者が出入りをするが、あまり真っ当な職業では無いように伺える。

（こんな所に、住まなきゃいけないの…？）

沙希が荷物を降ろすと、見計らったように拳法部…いや、今は新生空手部員となった長井と稲村がやってくる。

「お、引っ越して来たな！」

居室のドアは、ドアノブの代わりに大穴が空いていて、ドアの機能を果たしていない。それは、まるでウエスタンドアのように、キイキイと前後に揺れている。

「な、なんですか…」

何度も犯された相手が部屋に入ってくる恐怖に、沙希は思わず身を竦ませる。

「あ？何だじゃねーだろ！引っ越しの手伝いしてやろうってんだ！殺すぞ？」

凄む長井に、思わず「ご、ごめんなさい」と謝る沙希。

その横で、先の荷物を漁りだすのは稲村だった。
二人は同学年で、副将の長井に一歩引いた態度を見せるに、どうやらそういう力関係なのだろう。

「これも要らないし、これも…。お金は預かるよ。スマホは親に持たされてるの？没収ね…」

ブツブツ言いながら、沙希の荷物をどんどん奪っていく。

「とりあえず、こんだけで良いでしょ」

残ったのは、学校の制服や体操着。教科書などの筆記具。そして休日の私服が一着だけ。

「あ、あの…、私の下着が１枚も…無いんですけど…」

大きなゴミ袋に放り込まれた下着を見ながら、沙希は意図が理解できずに困惑する。

「ああ、沙希ちゃんは下着禁止だから。早く、それも脱いで寄越して」

指を胸に指して言う稲村の言葉に、動きが固まる沙希。

痺れを切らした長井が、「あくしろよ！」と、強引に沙希から下着を奪う。

沙希は思わず抵抗したが、それがかえって長井の逆鱗に触れ、少ない私服がビリビリに破かれてしまう。

屈辱と恥ずかしさに、全身を抱えるように隠してむせび泣く沙希。

だが、長井も稲村も意に介する様子は無い。

「はい、協力ありがとね。それじゃ、この施設を案内するから、付

いてきて」
稲村が沙希の手を引くと、そのまま部屋を出て階下に向かう。
「ま、待って！　わたし…裸！　ふ、服を…」
長井が「うるせぇよ！」と沙希の小振りの尻に蹴りを入れると、沙希は観念したように抵抗を止める。
「キッチンはここ。ゴミは分別しないと持っていってくれないからね」
ポリバケツのゴミ箱は、分別どころか生ゴミや汚水のようなものまで放り込まれ、無法状態だ。
その酸っぱい臭いは悪臭と言うに相応しく、思わず目から涙が溢れる。
「あー、丁度いいや。沙希ちゃん、ここお願いね。後で加藤と草凪呼んでおくから、俺等は行くね」
そう言うと、長井と稲村はさっさと退散してしまう。
案内とは何だったのだろうか、実にいい加減な話だと沙希は思った。
その目的が、お金と携帯電話を奪うことだと気付くのは、あまり時間が掛からなかった。

０４　寮から奴らのアパートへ引っ越し②【露出】★

ポツ、ポツと雨が降ってくる音が聞こえる。梅雨の時期なので、それは珍しいことではない。

むしろ、昼下がりに１５歳の少女が、全裸で台所に居ることのほうが、よほど不自然だろう。

（こ、こんな格好で…、全裸で台所の掃除なんて…）

沙希は、稲村に言われた通りに、ゴミの分別をしていた。最初は胸やあそこを隠しながら、モジモジと作業を進める沙希だった。

＜i816115―43402＞

しかし、次第に全裸でいることに慣れてきたのか、あるいは作業に没頭してきたのか、自分の姿に気にすることなく、作業を進めていく。

（はやく終わらせよう。そうすれば、ここに留まる理由も無くなる…）

ポリバケツに積み込まれたものは、実に多種多様であった。

グニュっとした感触に「ひっ！」と身をすくめる沙希。中身は汚物を包んだ袋だった。

これは沙希にとって幸運だったかも知れない。何故なら、次に出て

きたゴミは、使用済みの注射器だったからだ。

もし不用意に掴んだら、破傷風か、あるいは感染症の危険があったかもしれない。

（いったい、どんな人間が住んでいるのかしら…）

よく見ると、並べて放置されているペットボトルは、どす黒い茶色の液体が並んでいる。まさか腐った尿とは、沙希は理解出来なかった。

◇◇◇

一通りのゴミの分別が終わった頃、外は土砂降りの雨になっていた。

「ひー、天気予報言ってたっけ、今日は降るって？」

駆け込むように入ってきたのは、1年の加藤と、2年の草凪だ。二人は歳は違うが仲が良く、共に3年に顎で使われる下っ端のようだ。

バタン、ドタン！

突然の来訪者に、驚くと同時に自分の状態を思い出し、沙希は思わず悲鳴を上げる。

「キャアー！！」

沙希に気付いた加藤は、ニヤリと下品な笑みを浮かべる。

「おおー、沙希ちゃん。すげー格好でどうしたの？」

加藤のニヤけ表情に対し、沙希はキッと強い表情で睨みつける。
（こいつら…確か、試合で大将と副将を…、つまり本来の実力は先鋒と次鋒の…）
沙希の手元に分別された袋を見て、草凪は状況を察する。
「なんだ、水野。ゴミの片付けしてくれたのか」
自分達の仕事が解放されたと、二人は喜ぶ。
どうやら、今までこういった雑務は、彼らの仕事だったようだ。
「鬼村さんも、ケチな人だよなー。本来はあの人の仕事だろ？せめてバイト代くらい、よこせよなって思うよ…」
愚痴を言いながら、手で胸を隠す沙希の裸体を舐めるように見る草凪と加藤。
流石に若さからくる再生力だろうか、全身のアザは小さくなり、青色から黄ばんだ色になっている。
「丁度いいや、水野。明日は缶のゴミ回収日だから、外のゴミ回収場まで、持って行って」
ニヤリと笑みを浮かべ、そう命じる草凪。
「そ、それじゃあ、服を着替えて、行ってきます…」沙希がそう言って、胸と股間を隠して部屋へ行こうとすると、草凪は腕を掴んで、沙希を止める。

「え、何故…？」

「いいじゃん、どうせ外は土砂降りなんだし」

外は雨で誰も居ないし、服着たら濡れるし、ゴミにまみれて汚れた沙希の身体も清められると、一石三鳥と加藤は笑いながら、言う。

「で、でも…そんな非常識な…、いえ、分かりました」

（何を言っても、どうせ聞き入れてくれない…）

そう理解し、覚悟を決めた沙希は、ゴミ袋を抱えて外に向かう。

◇◇◇

缶のゴミは４袋にも渡り、どうやら相当量の酒を、この隠れ家のようなアパートで毎晩浴びるように飲んでることが伺い知れる。

（この量、一回で持っていきたいけど、流石に無理だよね…）

とりあえずゴミをまとめると、覚悟を決めて外に出る。玄関を飛び出すと、水溜りに沙希の裸足の足がズボッとはまり、水飛沫を上げる。

「きゃっ！」

沙希は足のグニュっとした感触を直接素足に感じる。

（うぇ、泥みたいなのが、足の指に絡みつくみたいで…気持ち悪い

…）

気を取り直し、沙希はそのまま全力でゴミ集積所へ向かう。

（い、痛い。雨が叩きつけてくる…。まるで滝に打たれてるみたいだわ…）

雨は滝のように降り注ぎ、沙希の髪をあっという間にずぶ濡れにする。

「んぶっ…ぷは…ごぼ…ぷは…」

両手にゴミ袋を抱えて外に飛び出す全裸の少女は、土砂降りの雨がカーテン代わりとなり、殆どその姿を目視できなかった。

＜ｉ８１８１００｜４３４０２＞

（よかった、これなら…誰にも見られることなく、行ける！）

アパートからゴミの集積所まで、距離にして2～3分程度だが、沙希にとって恐ろしく遠い距離に思えた。

（全裸で昼間から外に出るなんて…）

恥ずかしさを押し殺して、ゴミ集積所にたどり着く。

雨で重くなったゴミ集積の扉を両手で押し上げると、同じように雨水が袋に入って重くなったゴミ袋を、集積箱に押し入れる。

（ん…しょ、重いし、雨が強く叩きつけて、手が滑る…）

雨で息苦しさに耐えながら、なんとか一巡目を終える沙希。しかし、ゴミ袋はあと2つある。

(雨で、視界がよく見えない…、さっきより、強くなったかも…)

沙希は急いでアパートに戻り、もう2つのゴミ袋を持って再びゴミ集積所に駆け戻る。

缶が袋でぶつかり合う音は、豪雨の音でかき消される。

(このゴミを出し切れば、家に入れる…)

残りのゴミも集積所に廃棄し、沙希は一息つく。

(良かった…、雨が止む前に、ゴミをだしおえることが出来たわ…)

沙希がそう思った矢先、雨がポツリ、ポツリと小振りになり、黒い雲の間からは、陽の光が差す。

(え…うそ…、雨が…このタイミングで…?)

全身に濡れた沙希の裸身が陽の光に反射して、まるで妖精が舞い降りたような美しさを放っていた。

０５　お風呂で奉仕プレイ①【露出：３Ｐ】★

この時期は突然の土砂降りは、よくある事だ。

リモートワーカーの山田は、雨が上がっていることに気付き、窓を開け伸びをする。

ふと外を見ると、陽の光に反射する道路が美しくもある。コーヒーを口に含むと、香ばしい香りが口から鼻腔に抜ける。

そして目線を移すと、そこには全裸の少女が呆然と立っているのが目に映る。

＜ｉ８１８２４８－４３４０２＞

その瞬間、山田はコーヒーを鼻から吹き出し、思わず慌てて窓を閉める。

（うそ…、なんで雨が止んで…男の人に見られたかも…）

沙希は真っ赤になり、大急ぎでアパートに戻る。

（うそ、うそうそ！ぜったいに、見られた！目が、合った…）

もう羞恥とか言っている場合ではない。全力で、大股開きだろうと関係なく、出来る限りの本気走りでその場を逃げ出す沙希。

だが、あまり慌ててしまったせいか、途中で水溜りに滑り、大股を

広げて転倒する。

「うぐっ！！」

運動神経の良いはずの沙希だが、股関節をバキッと鳴らし、ヨタヨタ歩きになってしまう。

（い、痛い…、バキッって音が股からした…、走りたいのに…股が上手く…動かない）

時間にして５分程度だろうが、沙希には途方も無い時間に思えた。

（どんどん晴れて…、私の裸、晒されていく…、見られちゃう…）

真昼の全裸徘徊をさせられた沙希は、あまりの恥ずかしさに、アパートに着くなりうずくまって泣いてしまう。

「おかえり、ご苦労さん」

草凪が沙希に優しい声を掛ける。

「濡れたままじゃ風邪引くし。お風呂で温まって！」

と気遣った言葉を掛けるのは加藤。

（こいつらのせいで…恥ずかしい思いしたのに…）

促されるまま、沙希と男二人は風呂場へ向かう。

「ささ、脱いだ、脱いだ！」

「て、もう脱いでるじゃーん！」

二人が漫才のようなやり取りをすると、沙希も思わず頬が緩む。

（なに、こいつら…、馬鹿みたいに戯けて…）

本来なら怒っても仕方ないような冗句だが、今の沙希の状況では、この気の緩みは安心感を与えた。

「ここが浴場だね。共用で使うから、けっこう広めなんだよ」

浴場は思ったより広く、沙希は驚いた。

いや、広いと言っても、一般家庭の、それも一人用の浴場と比べたら広いほうで、３人も湯船に浸かれば、肩がぶつかる。

それに対して、蛇口は壁側にそれぞれ２つずつ、４箇所設置されていて、４人まで同時に入ることを想定した作りとなっている。

真ん中には妙な壁があり、そこの前後にも蛇口の設置されていた痕跡が残っている。しかし、今は邪魔な壁でしか無い。

「それじゃ、水野。さっそく俺達を洗ってくれ」

「健康チェックはマネージャーの基本だろ？」

沙希は、やはりこうなるのかと、半ば諦めたように草凪の背にタオルを擦る。

「ああ、ダメ、ダメ！こういうのは、手でやるんだ」

「え？」と戸惑う沙希に、湯船に使って様子を見ていた加藤が、優しく助言する。

「そ。手で石鹸を伸ばして…とりあえず、やってみな？」

言われた通りにすると、草凪の逞しい背が石鹸にまみれる。

（あ…、なんか、大きくて逞しい…男の人の背中だ…）

沙希は既に処女ではなく、この男とも、強引にではあるが、関係を持っている。

だが、改めて彼の背を見ると、そこに男の魅力を感じてしまう。

「そしたら、後ろから抱きつくようにして、ゴシゴシとやってみ？」

「は、はい…」

ぎこちなく身体を動かす沙希。その実りかけの、小振りの乳房の先端が、動きに合わせて草凪の背中でコロコロする。

「もっと強く、ゴシゴシと。自分の体をスポンジに見立てて」

沙希が言われた通りに必死に動くと、徐々に草凪の背中が泡立ってくる。それに伴い、沙希の乳首も大きく膨らみ、コリコリした硬さに勃起する。

（やだな…、ちょっと、心臓がトクトクして、変な気持ちになって

くる…）

沙希は、どういう訳か、この憎いはずの男が、少し愛おしいと思える感情が芽生えていた。

酷い仕打ちの後で少し優しくされた事と、逞しい背中に素肌で抱きつく行為が、彼女の感情をバグらせたのかも知れない

「へへ、そしたら、次は俺にしてもらって、いい？」

湯船から上がると、加藤は草凪の隣にドカッと座る。
草凪が細身で締まった肉体に対し、加藤はどちらかと言うと、中肉といった感じだ。

「そ、それじゃあ…失礼します…」

沙希が草凪から離れ、加藤の背に回る。
すると加藤は「違う、違う」と、自分の横に来るように命じる。

「ナギくん、壺洗い、やってみていい？」

「おー、いいねぇ」

そう言うと、加藤は石鹸を千切って親指大に捏ねると、沙希の膣内に押し込む。

「あ…」

石鹸は滑らかにニュルンと沙希の膣奥に潜り込む。

（やだ、膣に石鹸が…ウニウニ動いてる…）

沙希の膣内がピクンと小さく蠕動すると、膣壁に擦られた石鹸が奥に進むように動き、泡となって秘唇から吐き出される。

「よーし、それじゃ、まず俺の腕に跨って…」

０６　お風呂で奉仕プレイ②【３Ｐ】

「俺の腕に跨って」

加藤はそう言うと、太い腕をぬっと伸ばす。

「え、ど、どういう…？」

「いいから、やって！」

加藤が少し語尾を強めて「早く！」と言うと、沙希は慌てて加藤の腕に跨る。

「あぐっ…」

が、転んでバランスを崩した際に股関節をやっていた沙希は、加藤の眼前に大股を広げた状態で、少し動きが緩慢になる。

１５歳の熟れきっていない未熟なマ◯コを眼前で鑑賞した加藤は思わずニンマリする。

「おほぅ…いいねぇ」

(やだ…恥ずかしい格好を、こんな風に男の眼の前に晒すなんて…)

加藤の喜びに対し、赤面し涙目する沙希。

「さて準備できたら、まずオマ◯コでゴシゴシと腕を洗うの」

「ご…ゴシゴシって…」

加藤が空いている手でジェスチャーするように、腰を振って擦り付けるよう、指示を出す。

（そんな…猿みたいな動き、しなきゃいけないなんて…）

躊躇する沙希に、加藤が「やって！」と語尾を強める。
その掛け声を皮切りに、沙希は腰を前後に振って加藤の腕に陰唇を擦り付ける。

ニュチョ、ニュチョ、ニュチョ…

「早く、もっと早く！」

沙希が必死に腰を動かすと、徐々にその身体に変化が現れる。

ニュッニュッニュニュチャッニュッニュプ…

「あ…」

沙希がピクンと、動きを止める。
先ほど草凪の背中を流した時に乳首が硬く尖ったように、彼女の陰角も、同じように変化していたのだ。

「ちょっと、なに動き止めてんの！もっと、もっと泡立てないと！」

「は、はい…」

加藤に促され、再び腰を前後する沙希。
だが、先刻までは包皮に守られていた陰角が、今は剥き出した状態で、加藤の腕を滑り動く。
再び動きを止めてしまう沙希に、加藤は自ら腕を前後させる。
「だから、こうだよ、こう！ゴシゴシ、ゴシゴシ。こうやって、ゴシゴシゴシゴシ…」
「ひ、駄目…止めて！あ、ああ…」
沙希はガニ股の姿勢でブルブル震えると、勢いよく尿道から潮を吹き出す。
それは霧吹きのように広く散乱し、加藤の腕はおろか、草凪にまで吹き付ける。
「うぉっ！何やってんだよ、お前！」
草凪は思わず立ち上がり、どちらにとも言わずにそう叫ぶ。
「あーあ、せっかく洗ったのに汚して、どうすんだよ…」
沙希の潮は若干粘りを含んでおり、二人はベタベタした汁を滴らせる。
「なんだよ、オシッコ漏らしてぶっ掛けられたと思ったけど、愛液じゃね、これ？」
指で粘りを確認すると、加藤はそのネバネバ液を沙希の唇に塗りたくる。

「はぁ…はぁ…、あ、あぅ…、あ…」

沙希は力無く崩れ、加藤の腕を股間で挟んだまま、両ひざを床につ
いて肩で息をする。

「…ったく、いつまで腕を挟んでる…のっと！」

加藤が強引に沙希の両脚から腕を引き抜くと、その刺激で沙希は再
び悲鳴を上げる。

「きゃひぃっ！」

バランスを崩し、後ろに倒れる沙希をハッシと支える草凪。

加藤はそのまま草凪と向かい合うように向きを変えると、真ん中に
座す沙希の両脚を割り開く。

「きゃっ！」

男にマジマジと自身の秘貝を覗かれ、恥ずかしくて死にそうになる。

しかし、沙希のそこは彼女の感情とは正反対に、陰角を勃起させ、
その陰唇はパクパクと口を開けている。

「いい感じじゃん、沙希ちゃん。そしたら、壷洗い行ってみようか
？」

加藤がそう言うと、草凪がニヤリと笑みを浮かべる。

「いい、沙希ちゃん。壺洗いってには、沙希ちゃんのオマ◯コで、俺等はにチ◯ポを洗うことを言うのよ」

それを聞き、沙希はカァっと顔を赤面させる。

改めて性行為の説明を受けると、途端に自分のしていることが恥ずかしくなる。

「でも、俺等は二人。沙希ちゃんは一人」

加藤は一呼吸置き、沙希に「さてどうすれば、いいと思う？」と尋ねる。

「え、ええと…、交互に、あの、アレを…その…」

理解はしたが口ごもる沙希に、草凪が後からパアンッと尻を叩き、叱りつける。

「きゃうっ！！」

「ほらほら、そんな単語で恥じらってちゃ、長井さんとかだったら酷い目にあっちゃうよ！」

沙希は「す、すみません…」と詫びる。

加藤はニヤニヤ笑いながら、説明を続ける。

「まあ、やることは理解出来たよね。で、こっから大事だけど、よく聞いてね」

「は、はい…」

07　お風呂で奉仕プレイ③【3P】

狭い浴室に3人の人影が、湯気で曇ったガラスに映る。
プラスチックの風呂椅子に向かい合って座る男と、その中央で両膝で立つ小柄な少女。
「いいかい、俺等のチ○ポを、沙希のマ○コひとつで満足させなきゃいけないのは理解出来たよね」
沙希は顔を赤らめ、「は、はい…」と小さく頷く。
「そのために、交互にチ○ポを出し入れするってのも、だいたい合ってる」
「あ…ありがとう、御座います…」
加藤は、「そこでだ！」と、満面の笑みで両膝立ちの沙希の頬を、両手で持つ。
沙希は思わず「んぶっ」と口の中の空気を吹き出すが、加藤は意に返さず言葉を続ける。
「スピードは当然大事。でも、これから言う通りに腰を動かす…いいね」
加藤の説明は、こうだった。

まず、加藤のそそり立つペ◯スを沙希のオマ◯コに、根本まで深く突き立てる。
次に、一度、亀頭までペ◯スをオマ◯コから引き抜いて、再び根本まで突き立てる。
それから加藤のペ◯スを完全に引き抜き、草凪のペ◯スを同じようにオマ◯コで突き立てる。
これを高速で繰り返すというものだった。
「よし、水野。まずはやってみろ」
草凪が号令をかけると、沙希は「はい…」と、両膝を上げて立ち上がる。
すると草凪の眼前には沙希の小ぶりの尻が位置し、先ほど叩いた草凪の手形が、真っ赤に色付いてヒクヒク今にも動き出しそうになっている。
一方の加藤の眼前には、散々犯されたにも関わらず、未熟な女性器が位置する。クリトリスだけは真っ直ぐに突起し、ピクピクと上下に細かく蠢いている。
「それでは…始めます…」
そう言うと、沙希は腰を降ろして加藤のそそり勃つペ◯スに、ヌプっと音を立てて咥え込む。
中には歪な形の石鹸が含まれており、コリコリと加藤の男性器を刺激する。
「お…おおぅ…」

加藤も思わず声を出す。

「ぜんぜん、遅い！水野！もっとスピード！」

加藤の代わりに沙希に指導する草凪。
沙希は「は、はい！」と、腰に力を入れる。

亀頭まで引き抜いたペ◯スを再び奥まで突き入れ、一気に腰を上げて引き抜く沙希。

ジュポンッ！

勢いよく引き抜かれた加藤のペ◯スと、沙希のオマ◯コからは納豆のように糸を伸ばして名残惜しそうにする。

草凪の鼻先を沙希のお尻がかすり、そのまま下に移動したかと思うと、草凪のペ◯スが熱いもので勢い良く包まれる。

「う…ぬおぉ…」

今度は、草凪が加藤と同じように喘ぎ声を上げる。

ヌポ、グチュ…

根本まで熱されるように包まれたペ◯スが亀頭まで引き抜かれ、再び根本まで包まれる。

そしてヌポンッ！と完全に引き抜かれると、亀頭が心地良い外気に当てられ、硬く収縮する。

加藤の鼻先にクリトリスがシュっと擦られたかと思うと、次の瞬間、そそり勃つペ◯スがジュポポっと熱いお搾りで包まれるような感触に襲われる。

この動作を繰り返すうちに、沙希はコツを理解したのか、動きがスムーズに、そしてテンポ良くなってくる。

ヌプゥ…ヌッチョ…ヌポン…

「ん…んぁ…あん…あ…」

ヌプゥ…ヌッチョ…ヌポン…

「ぬ…ぬぉ…こ、これは…」

ヌプゥ…ヌッチョ…ヌポン…

「ちょ…すげ…これ、やべぇ…」

加藤のペ◯スと草凪のペ◯スを行き来する沙希のオマ◯コは、連結の証のように太い糸を引く。

そして、高速で動く沙希のオマ◯コは、その糸が千切れて地面に垂れることを許さない。

加藤の眼前を行き来する沙希のオマ◯コの映像は、ピストンを繰り返す度に淫猥に変化する。

「み、水野！こっちを向け！俺にも、見せろ！」

草凪の命令に、沙希は「は、はい！」と、立ち上がりの際に身体の向きを１８０度、グルンと向き替える。

「おふっ、ぬぁお…」

立ち上がりの際に向き変えた為、加藤のペ◯スは捻りが加わった引き抜き動作となる。

そして、草凪の眼前に映し出された沙希のオマ◯コは、充血が増し、更に艶かしく色付いている。

「こ、これは…ちょ、すげ…」

そして、それはすぐに下に降りると、視界から消える代わりに、触覚に訴えかけるように刺激する。

ドピュル…ドプ…ドプッ…

その瞬間、草凪は沙希の胎内に大量の精を、ぶち撒けていた。

０８　お風呂で奉仕プレイ④【３Ｐ：秘部開帳】★

ドピュル、ドプ…ドプゥッ…

恍惚に表情で果てる草凪の表情に、加藤は彼が絶頂に達したことを察する。

「ま、沙希ち…、ちょ、ストップ！止まれ！止ま…」

高速で腰を動かす沙希は急な停止命令に対応出来ず、膣内に草凪の精液を蓄えたまま、加藤のペ◯スを勢い良く突き立てる。

ヌプチュ…グッポ…グプ…

加藤の亀頭まで引き抜き、再びペ◯スを根本まで突き入れた所で、沙希は腰の動きを止める。

「う…ぬあっ…」

加藤は喘ぎ声を上げ、草凪と同じようにドプドプと沙希の胎内に射精する。

「あ…、ひあ…あぁーっ！」

沙希もまた、激しい動きを止めた瞬間、それまで溜めたバネが弾けるかのように、膣全体に痺れるような刺激が襲いかかる。

プシューッ

沙希は再び、加藤のペ◯スを咥え込んだまま、尿道から勢い良く、潮を吹く。
霧吹きのように吹き出した透明の液は、草凪をローションをかけたかのようにねっとり濡らす。

「あ…、ああ、ん…あ…」

3人は暫く動きが止まり、まるで震える彫像のように、ビクンビクンと痙攣をする。
暫くの沈黙の後、最初に動いたのは沙希だった。膝を震わせながら真っ直ぐ立ち上がると、咥えていた加藤のペ◯スをヌプっと吐き出される。
フラフラと動き出した沙希だったが、腰の負担が大きすぎたのか、あるいは膣内がまだ絶頂を繰り返してるのか、力無く地面に腰砕ける。

「あ…、腰が、もう…」

ペタンとトンビ座りで呆ける沙希の前に、カリ首をを下げて、まだドプドプと精液を滴らせる加藤と草凪が気怠そうに躍り出る。
「ああー、もう。俺のチ◯ポがナギの精液まみれになってんじゃん…」
虚ろな目の沙希の眼前に、白濁した液にまみれたペ◯スがズイっと出される。

「はは。それじゃ水野。まずはソレを、口で綺麗に舐め清めて」

沙希は無言で、それを口に頬張る。
連日の陵辱により仕込まれた沙希は、既に口淫に対する躊躇はさほど感じなくなっていた。

「ん…ちゅぱ…んくっ…ん…」

口技(フェラのテク)の知識は無いものの、「舐めて清める」という指示に従って必死に舌を動かす沙希。

「やべ…、また、出る！！」

ドピュル、ドピュゥッ！

沙希の口内に盛大に精液を放つ加藤。
対して沙希は、喉にベタリと絡みついた精液にむせ、ゴホゴホと咳をする。

その様子を見ていた草凪は、浴室にあるカゴから、何か金属音をジャラジャラ鳴らして、何かを取り出す。
「ちょっと胎内(ナカ)に出し過ぎたし、恒例のアレ、やっとこうか」
加藤はニヤリと笑うと、沙希の腕を掴んで強引に立ち上がらせる。
「いた…、急に…引っ張られると…、あ…」
強引に立ち上がらされた沙希は、その拍子に股間に力が入り、その陰裂から小水がビシャビシャと吹きこぼれる。

いや、それは小水ではなく、精液と、自ら吹き出した愛液、そして石鹸をブレンドした、白濁した泡立つ粘液だった。

「おお、すっげ。超いやらしいじゃん、沙希ちゃんのマ◯コ！」

フラフラと倒れそうになる沙希を支え、加藤は浴槽の縁に座らせる。

浴槽は湯がたっぷり張ってあり、そこから上がってくる湯気が、沙希の背中をポカポカと温める。

「それじゃ、水野。その両脚を、ここに伸ばして…」

草凪は指示を出すものの、彼女の意思と関係なく、強引に沙希の両脚を大きく開かせる。

開脚姿勢となった沙希の秘部は、筋肉に引っ張られるように小さな口をクパァと小さく開く。

「両脚をこれで、固定して…と」

沙希の秘唇がパクパクと蠢く光景に目もくれず、草凪は彼女の足首にベルトのような拘束具を巻き、床に生えたUの字を逆にして突き刺したような固定具と連結する。

沙希は左右の脚を大開脚した状態で固定され、もはや脚を閉じて秘部を隠すことは、1ミリたりとも叶わない。

もっとも呆けた状態の沙希に、そんな気力は残っていない。彼らに見られた所で、もはや今更…という諦めも気持ちの中に含まれる。

「最後に、コレをオマ◯コに突き刺して…と」

草凪が沙希の膣に差し込んだのは、膣鏡と言われる女性器を広げる医療器具だ。

ただし、それは針金で自作したであろう、骨組みだけで作られたような、無骨な拡張器だ。

ヌプ…

沙希は「あ…」と小さく喘ぎ声をあげ、その針金を受け入れる。

針金は完全に沙希の胎内に飲み込まれると、草凪は更に奥へと、沙希の女性器に指を差し込み押し入れる。

「んぁ…、いた…、くぅん…」

最奥まで押し込まれた膣鏡を更に奥まで押し込む草凪。
だが、沙希のそこは、行き止まりを証明するかのように、埋没した膣鏡の先端を、子宮口がプクリと形を戻し、押し返す。

「おし、子宮まで届いたな…」

草凪がネジのような小さい部品を器用に回すと、針金の膣鏡は沙希の胎内で徐々にその大きさを拡げていく。

クパァ…

陰唇は沙希の年齢と体系に相応しい、申し訳程度に開いているが、

その内部はギチギチに拡張されているのが分かる。

＜ｉ８３１４１５―４３４０２＞

流石の沙希も、羞恥に顔を紅く染め、脚を閉じようと腰を振って藻搔く。

「い…いやぁ！こんな、丸見え…いやぁ！」

沙希の悲鳴を気にせず、加藤は湯船に入り、沙希の背後に陣取る。

「沙希ちゃんも妊娠は困るだろ？」

加藤が耳元でそう呟くと、草凪は蛇口に繋がれたホースを持って、狙いを定める。

沙希は、これから何が起こるのか、理解した…

０９　お風呂で奉仕プレイ⑤【秘部開帳：膣内強水圧洗浄】★

浴槽の縁に開脚姿勢でオマ◯コを晒す沙希は、羞恥よりも恐怖が勝っていた。

草凪の手にしたホースは彼女の膣口に向けられ、今にも高い水圧で鉄砲水を吐き出さんと、その口を歪めている。

<·i８３１４１５|４３４０２>

そして、沙希の膣内部は、手作りの膣鏡によって大きく拡げられ、膣壁がその針金をキュウキュウと締め付ける。

「おし、そろそろ出るぞ。加藤、水野を沈めて！」

号令と共に、先の背後に回った加藤が、沙希の肩を後ろに強く引いて、倒させる。

ザブンッ

大きな水音と共に、沙希は頭から湯船に突っ込む。

が、脚が開脚姿勢のまま固定されている為、上半身だけが湯船に沈み、両手をバタつかせて藻掻き苦しむ。

それと同時に、沙希の女性器を狙ったホースの先から、鉄砲水が勢い良く射出される。

<·i８３２４７３|４３４０２>

「んぐ、ぐぼ！…ぼ…あぼぼ…ぶはっ！」

飛び起きるかのように、背筋を使って湯船から顔を持ち上げる沙希。

その腰は恥骨が皮膚を破って天井にぶつかると思えるほど、大きく痙攣する。

「おおー、すげぇ。汚れがすごい勢いで、落ちてくる！」

ホース先を器用にすぼめ、鉄砲水の勢いを調整する草凪だが、狙う先は基本的に、子宮口だ。

当然だが、僅か数ミリしか無い沙希の子宮口に高い水圧で水をぶつけても、その殆どは弾かれる。

沙希の胎内の最奥で弾けた水鉄砲は、八方に分散した水鉄砲と化し、それがまた分散しと、まるで膣内で乱反射する弾丸のように暴れまわる。

「ぎゃひ…、や、やめ…あぎゃ…！」

少しでも腰を動かして水鉄砲を避けようとするも、その僅かな抵抗は、草凪の狙いを少しずらすに過ぎず、却って膣壁や尿道口など、別な敏感な部位を強く刺激してしまう。

「おーい、水野、あまり動くな。却って辛いぞ」

先の上半身が湯船から上がり、ようやく安定したタイミングで、加藤は再び肩を掴んで湯に沈める。

「アバ！ゴボ…ゴボ…、グハッ、アバッ！」

溺れている間も、沙希の膣内は強烈な鉄砲水が縦横無尽に駆け巡り、精液や愛液をこそぎ取って排出される。

「ほらほら、沙希ちゃん。腹筋と背筋で、身体を起こす。何のために筋肉つけてるの？」

必死で状態を起こそうとする沙希だが、凶悪な鉄砲水を子宮口にぶつけられ、その刺激に自然と仰け反った姿勢になる。

時折、加藤が沙希の身体を水から引き上げ、草凪に「ストップ、ストップ」と小休止の合図を送る。

しかし、沙希の呼吸が安定したと思えば、再びこの地獄の行為を繰り返す。

「さて…と、こんなもんだろ」

草凪が蛇口を止めると、沙希は腹に力を込め、必死で湯船から頭を起こす。

その腹圧からか、大きく口を開いた陰唇の奥、子宮口から細い水が、ビューーっと吹き出す。

子宮に向けて撃たれた水鉄砲の量からすれば大した量ではないが、それでも確実に、水鉄砲は子宮内を満たしていた。

「これが、俺達の編み出したスーパー避妊術ってわけ」

ゼイゼイと息をする沙希の肩を持ち支え、加藤が笑顔で、そう説明する。

足の拘束具を外すと、草凪は沙希に優しく湯船に浸かり体を温めるように促す。

改めて３人で湯船に浸かり、身を清める。

浴場から出た時には、既に日が落ちて夜になっていた。

沙希は下着こそ着用が許されないものの、スエットの上下の着用は許された。

その後、沙希は二人に夕食を振舞う。

と言っても、料理の経験が無い沙希は、レトルトカレーを振る舞うのが精一杯だった。

しかし、二人は文句なく笑顔で平らげ、沙希に褒め言葉を投げかける。

「それじゃ俺達は帰るけど、沙希ちゃんも今日はゆっくり休んで、明日も俺等のサポートをよろしく頼むよ」

そう言い残し、暗がりを去っていった。

◇◇◇

沙希は自室に戻ると、硬いベッドに身を預け、どっと横たわる。

毎日のように犯されているけど、今日は凄かった…と1日を振り返

る。

（私…何やってるんだろう…？）

これが自分の望んだことなのか、まるで分からなくなってくる。

しかし、鬼村の「八海山高校空手部を優勝に導いてやる」という言葉と、彼らが時折見せる優しさに縋ってやり過ごすしか、今の沙希には思いつかなかった…

１０　露出授業①【極太ディルド】

生徒達が次々と正門をくぐり、校舎へと入っていく。
友達と談笑しながら入る者、冗談を言い合いながら戯けて入る者、
真面目に語らいながら入る者…
そんなありふれた日常のひとコマ、沙希だけは、少し緊張の面持ちで、早足で校舎に入る。
（大丈夫…、バレてない…。バレるわけが無い…）
スカートの裾を気持ち、押さえながら教室に向かう沙希は、心配事があった。
それは、新生空手部の稲村に、下着を全て処分されたことである。
従って、今、この１５歳の成長途上の少女は、初々しいセーラー服の下に着衣を身に着けていないことになる。
そして、もうひとつの心配事は…
（あ、どうしよう…。また、垂れてきて…）
昨日の激しいＳＥＸは沙希の膣を強く刺激したようで、未だに潤いが止まらない状態だった。
（また、トイレで拭かないと…）

沙希が朝、目覚めた時は、もっと凄かった。

股間がベタッと張り付く感触に、「まさか夜尿症?!」と驚いて飛び起きると、それは履いていたスウェットから滴るほどの愛液だった。

「今日は、とても学校なんて、行けないよ…」

そう呟いた矢先、まるで見張っていたかのようなタイミングで、メールが入る。

「1限目が終わったら、道場へ来い」

差出人が「拳法部」となっているから、きっと鬼村か長井、それか稲村だろう。

3年を差し置いて、加藤や草凪が私を私物化すると思えない。沙希はそう思った。

沙希は観念するように立ち上がると、セーラー服に身を包み、濡れたスウェットズボンをそのまま、重い足取りで学校へ向かうのだ。

◇◇◇

キーンコーン…

授業終了のチャイムが鳴る頃に、沙希の股間の疼きもようやく収まって思えた。

が、席を立つと「ヌチャ…」と糸を引いて、下着のない沙希の秘部

と椅子の底が、愛液で連結する。

沙希はさり気なくハンカチで椅子を拭うと、足早に教室を後にする。

（道場に、何の用かしら…）

彼らが道場で練習をした姿は見たことが無く、やることと言えば沙希を玩具に、日夜ＳＥＸに明け暮れている。

つまり、そういうことなのだろう…

（２限目をサボった言い訳、考えないと…）

そんなことを考えながら、沙希は道場に到着する。

「お、来た、来た…」

「よう沙希ちゃん、昨日はよく眠れた？」

道場に入ると、以外にも出迎えたのは、加藤と草凪だった。

「え…、呼んだのって、あなた達？！」

想定外に、驚く沙希。軽く見回して、他にメンバーが居るようには、見えない。

「いやぁ、実はさ。昨日のあの後、稲村さんと会ってさ…」

言いながら、加藤は紙袋から、ベルトのような紐状のものを取り出す。

「やっぱ下着のなしは可哀想って、用意してくれたんだわ…」
紐状のそれは、レザー製の「紐パン」であった。
それはまるで、パンティの縁以外の布を排除したようなデザインで、
殆ど履いてないに等しい。
だが、一際目を引くのは、クロッチの部分にそそり勃つ、男根を模したシリコンゴムのディルドだ。
黒光りしたそれは、直径５センチ、長さは２０センチはあろう、凶悪なサイズの代物だった。
「ひっ…」
思わず後ずさる沙希に、加藤はズイと前に出て、履くように命令する。
「大丈夫だって。案外、沙希ちゃんのここは容量が広いから…」
草凪も「上の命令に逆らうと、かえってキツくなるよ」と、遠回しに圧をかける。
観念した沙希は、「分かりました…」と、加藤からディルド付き紐パンを受け取ろうと、手を伸ばす。
しかし、加藤は沙希に手渡さず、そのましゃがみ込んで、沙希のオマ◯コを眼前に映し出す。
「あれ、もうビンビンに濡れてるじゃん」

加藤は「履かしてあげる」と、沙希の片足を上げるよう、指示を出す。

「どうせだし、スカートもたくし上げて」

そう命令するのは、草凪だ。
沙希は言われた通り、片足を上げてスカートを捲る。

「それじゃ、いくよ」

加藤が沙希の両足にパンティを入れると、いよいよ濡れた女性器に目掛けて、巨大なディルドを突き立てる。

ズプ…ヌプ…グチュ…

「あ…はあぁ…」

沙希は大きく息を吐き、黒光る男根を、子宮に届くまで受け入れる。
しかし、20センチのディルドはまだ5センチほど外に出ており、完全に胎内に納まっていない。

キーンコーンカーンコーン…

2限目始業の鐘が鳴る。

「おっと、真面目な沙希ちゃんは、ちゃんと授業を受けないと」

と、強引にディルドを押し込もうとする加藤だが、既に限界まで押

し上げられた子宮口は、ミチミチとその形を潰しながら、抵抗する。
「あー、それじゃ無理だよ。貸してみな…」
見かねた草凪が、沙希の後に立ち、紐パンティの腰部分の両サイドをグッと掴むと、そのまま沙希の身体を持ち上げる。

１１　露出授業②【極太ディルド】

呼び出された沙希を道場で待っていたのは、加藤と草凪だった。

二人は稲村に、直径５センチ、長さ２０センチの極太ディルドを沙希の膣内に納めて生活させるよう、命令されていた。

「くそ…、なかなか全部入らな…い！」

沙希のオマ◯コは、その男根を模した太いシリコンゴムのそれを、なんとか１５センチ、飲み込んでいた。

だが、用意されたディルドは２０センチ。沙希の膣奥は、あと５センチ足りない。

「ひ…いぐ…、はっ…もう、無理…痛いし、苦しくて…」

ぐっとディルドを押し込む加藤だが、沙希の膣奥を終点に座する子宮口が、その形を潰した饅頭のような形状になりながら、必死に侵入を拒んでいる。

「加藤さ、こういう時は、無理に押し込むんじゃなく、水野の身体を持ち上げるんだよ」

そう言うと、草凪は沙希の背後に回り、紐パンの両サイドの紐を、グッと掴み、持ち上げる。

「あ…痛い…痛い、痛い痛い、いぎ…あぎゃあぁ！」

決して重くない、むしろ小柄で軽い部類に入る沙希の体重だが、それでも人間ひとりの体重が、股間の一点にかかるのだ。

メリ、メリ…と音がして、形を押しつぶすように歪めた子宮口が、1センチ、2センチと、ディルドの亀頭部分を包みこむ。

「あ…ぐが、あが…」

2~3センチ、宙に浮いて両脚をピクピク爪先立ちをする沙希は、「あ…」と声を漏らすと、そのままストンと、踵まで床に足を落とす。

紐パンのディルドは完全に根本まで沙希の胎内に納まり、草凪によって食い込まされたクロッチ部分が陰唇を隔たる一本の線のように映って見える。

「な、無理せずやれば、水野の身体が飲み込みやすいように動くってことさ」

ドヤ顔で説明する草凪だが、無理せずとは一体何なのだろう。

沙希はおヘソの当たりを押さえると、そこがゴリゴリと亀頭の形に浮き出ているのが分かる。

その刹那、沙希は口いっぱいに酸っぱいものが込み上げ、即座に口を抑えるも、バシャバシャと吐瀉物を神聖な道場の床に、まき散らす。

「う…うぷ…、うぶぇ…げぼっ、ごぽ…」

行き場を失った子宮口は、本体である子宮をグッと押し上げ、子宮は沙希の胃袋を圧迫したのだ。

「あーあ、沙希ちゃん。駄目だよ、そんな吐き散らかしたら…」

「ご…ごべ…ざ…さい…、うぷ…」

涙目で口をぬぐい、謝罪する沙希。

「水野、ここの処理は俺等がやるし、お前は授業に戻って。早く！」

「は…、はい」

ヨタヨタした足取りで、戻る沙希の後ろ姿を見守る二人。

「やっぱ水野にゃ、サイズが大きかったか？」

「俺もそう思ったけど、やんなきゃ俺等が稲村さんに文句言われるし…」

「上の命令は絶対」の組織に起こりがちな、現場に柔軟に対応出来ないシチュエーションというのは、社会でも多々、見受けられる。

結果、一番低い身分の沙希が、無茶な要求に答えなければならなかった。

ゴリ、ゴリ…と、沙希の胎内を抉るように掻き混ぜる特大のディルドは、先ほど吐いて空になった胃袋を、ゆっくりと刺激する。

（く…、苦しい、また、吐きそう…）

沙希を苦しめるのは、胃袋だけでは無い。

その小さな秘部を、直径5センチのシリコンゴムの太棒が、ギチギチと胎内（なか）を占有しているのだ。

初めての異物挿入。少なくとも、ディルドやバイブレータといった無機質な「大人の玩具」は、沙希は初めての体験だ。

一歩、また一歩と、足を前に踏み出す度に、沙希の股間を圧迫し、子宮口を押し上げる。

沙希がお腹を抱えてクラスルームに戻ったのは、実に開始のチャイムから、30分が経過してからだった。

１２　露出授業③【極太ディルド】

「お…遅れて、すみません」

沙希がクラスに戻ると、全員の注目は沙希に集まる。

沙希はクラスでは活発な方だったので、「最近、元気無いね」くらいの印象を、クラスメートは持っていた。

（みんな、私を…見てる）

遅れて授業に入ってくれば、注目されるのは当然だ。

しかし、今の沙希は「ノーブラ」「ノーパン」そして「膣内にディルドを咥えている」と、言い訳出来ない変態的な状態なのだ。

「う…うぶっ…」

緊張も加わり、沙希は更に気持ち悪くなる。

もともと沙希は、加藤と草凪によって、太さ5センチ、長さ２０センチの特大サイズのディルドを、根本まで貫かれるように、その小さい膣内に押し込まれている。

そのため、ディルドの先端部分が子宮口を圧迫し、押し上げられた子宮がまた胃袋を圧迫している状態なのだ。

だが、そのような事情を知らない者からすれば、気持ち悪そうにフラフラする様子は、健康に問題が生じている風にしか見えない。

「大丈夫か、水野。保険室に行ったほうが、良いんじゃないか？」

教師の山田は、沙希にそう促す。
しかし、もし保健室で身体を調べられたら…。

（全てがバレたら、何が起こるだろう…）

沙希は少し考える。

元拳法部の連中は、社会的制裁を受けるだろうか。
空手部は、消滅するのだろうか。
無理言って遠くの学校に送ってくれた両親は、どう思うだろう。

…私の夢って、なんだっけ？

（駄目、今は何も分からない…）

時間にしてほんの数秒だったが、沙希は「とにかく今は、このままにしたい…」と結論を出す。

なら、沙希は教師の山田に、こう答える。

「いえ、大丈夫です。席に戻ります…」

と、沙希は授業に参加することを選んだ。
保健室に行ったからと言って何も変わらない可能性も高いが、今はリスクは避けたいと思ったからだ。

フラフラと席に戻る沙希を見つめるクラスメート。

椅子を引き、沙希が着席する様子を見て、教師の山田は「よし、授業を再開する」と、教科書を持ち直し、黒板に体を向ける。

「うぷ…、げぇ…ゲボ…うぐ…」

その刹那、コポコポと喉から音を出して、机に派手に吐瀉する沙希。

沙希の周囲は悲鳴が上がり、山田は「沈まれ、沈まれ！」とクラスを落ち着かせる。

「がは…はぁー、はぁー…うぷ…」

席に着席した瞬間、体を折り曲げた沙希の胎内の極太ディルドは、ゴリっと今までに無い圧迫感で、沙希の胃袋から内臓から、まさに胎内(からだ)の中をかき混ぜたのだ。

「あー、水野。今すぐ保健室。誰か、付き添って」

「あたしが付き添います」

名乗りを上げたのは、沙希の最初の友人の「栞里(しおり)」だった。

「ほら、沙希ちゃん。立てる？」

栞里は沙希の吐瀉物が体をに付くことを気にせず、肩を回して、沙希を気遣いながら、保健室へ連れて行った。

保健医は不在だった為、沙希には取り敢えずベッドに横になって貰うことにした。

保険医の不在は、沙希にとっては幸いだった。

そして、結果的に午後の授業まで、沙希は保健室で横になれることが出来た。

ディルドの圧迫感はそのままだったが、少しずつ身体がそれを受け入れ、慣れて来るようだった。

昼休みが終わると、沙希はベッドから降りて、ゆっくりと立ち上がる。

ゴリュ…、メリ、メリュ…

「ん…ぐ、動いてる…けど、大丈夫そう…」

沙希は胎内で巨大なディルドが動く感触を覚えるが、入れられた時よりは、身体が慣れてきたと実感する。

「…とりあえず、午後の授業は、出よう」

そう決めると、沙希は先刻よりは早い歩調で、クラスルームに向かうのだった。

一方の栞里は、沙希を保健室に運ぶ際に、違和感を覚えていた。

「沙希ちゃん、ブラ…してなかったよね？」

ポカポカと日差しが指す午後の陽気に、栞里は流れる雲をぼんやり見つめていた。

１３　ささやかな反抗と大きな代償①【極太ディルド：脱衣】

放課後になり、部活やクラブ活動が本格に活動を開始すると、校舎は日中に無い活気と喧騒が溢れる。

空手部員達は、珍しく、道場で準備運動を行っていた。

いや、正しくは「沙希だけが」、空手部員達の前で準備運動を行っていた。

「沙希ちゃん、もっと筋を伸ばす」

「スピードが足りないよ」

部員達の野次に晒されながら、沙希は全身を真っ赤にして、汗を拭って準備運動をする。

◇◇◇

１日の授業を終えて、部活の為に道場に入る沙希は、既に他の空手部員全員が揃っていることを確認する。

「おせーぞ、沙希。１年が俺等より遅くて、どうする！」

「は、はい…、すみません…」

沙希が遅いのではなく、他の連中が授業をサボって道場に屯（たむろ）しているのが実態だが、それでも沙希は謝罪する。

道場は校舎の離れに設置されており、少し距離はあるが、隠れ家としては最適だ。故に不良の溜り場になることは必然だった。

（また、遊具が増えてる…）

神聖だった道場は、かつての空手部が居なくなったことで、無法と化している。

先日は壁にダーツが掛かっていたが、今度は麻雀卓が置かれている。

「ほら、水野。さっさと準備をして！」

そういうと、2年の草凪が、沙希に道着を投げ渡す。沙希はその場でセーラー服を脱ぐと、道着に着替える。

更衣室は男女兼用で存在するが、使わせて貰えない。

皆に見られながら、ストリップにように着替えるのが通例となってしまったのだ。

汗で貼り付いたセーラー服を脱ぐと、小さな胸の膨らみと、ピンク色の乳首が露わになる。ブラジャーは着けていない。

加藤は思わず「おぉ！」と歓声を挙げる。飽きるほど沙希の裸を見ているだろうが、何かを趣が違って興奮するのだろう。

そして、スカートのホックを外し、パサリと腰を覆う布を床に落とすと、小ぶりの尻が現れる。

いつもは着用が許されていないが、今日は、特別に紐パンティを着用していた。

「これは、これで…」と、稲村は言う。その紐パンは、腰とモモの付け根…つまり普通のパンティのゴムに当たる部分だけレザーで作られ、それ以外の余計な布は一切排除された設計だ。
クロッチの部分もかろうじて女性器の「穴」が隠れる程度のサイズで、フードを被ったクリトリスは普通に見えてしまっている。
沙希はしゃがんで道着を手に取る。その動作はまるで腰痛の年寄りのように、ゆっくり、そして慎重だ。
「く…、くぅ…」
その様子をニタニタ笑う周囲は、彼女の状況を理解しているからに、他ならない。
「で、どうよ？太さ5センチ、長さ20センチのディルドうぃオマ〇コに仕込んで、1日過ごした気分は？」
沙希は屈辱に唇を噛みしめ、涙目になる。しかし、何も言い返さず、黙って道着に袖を通す。
帯をギュッと結びたかった沙希だが、少し緩めに結んだのは、胎内に納めた大きなディルドの圧迫が原因なのは、言うまでもない。
最後に髪を結って後に纏めると、上半身だけ見ると、凛とした中にあどけなさの残る、女子格闘家といった雰囲気を醸し出す。
しかし、少し視線を下げれば、緩く帯を締めた道着は胸元をはだけさせ、下着を着用していないことが確認できる。

そして、その下半身は道着の丈で見え隠れする下着が、相当に卑猥な事になっているのが分かる。

「着替えました…」

沙希の道着に「下」は無い。
上着だけ着用して下は全裸となっている。誰か部外者が来ることは、きっと考えていないだろう。

「おお、よく見ると、沙希ちゃんのおヘソの上、不自然にぽっこり膨らんでるね」

稲村は沙希の道着を開いて、その腹部を確認する。
そして、へその上のゴルフボール大の膨らみを、スリスリと撫でる。

「あ…」

稲村の触れた位置は、彼女が前の穴から咥え込まれた、黒光りするディルドの、ちょうど亀頭部分にあたった。

「あ、あの…、もう触らないで…下さい」

埋め込まれたものを皮膚越しに撫でられた沙希は、ゾワゾワとした感触に、まるで臓器を触れられているような気持ち悪さを覚える。

「ははは、ごめん、ごめん」

言いながら、稲村は沙希の腹部…へその上のの例の膨らみを、手のひらでゆっくりググッと押し込む。

「う…ぐぅ、んぅ…」

朝のような嘔吐感は無く、代わりにムズムズした感覚が沙希を支配する。

「すっかり慣れたようだし、もう大丈夫だな、沙希！」

「は…はい…」

沙希は「何が大丈夫なのだろう？」と思ったが、とにかく先輩の言うことは肯定する暗黙の了解に従い、「はい」と返事をする。

「よし、まずは準備体操から」

稲村の号令に、沙希は「はい」と直立の姿勢で、構える。そこで、ようやく稲村の意図を理解した。

（この状態で、身体を動かせと…いうの？！）

１４　ささやかな反抗と大きな代償②【極太ディルドを入れて体操】

運動前の準備体操は、スポーツをやる者に欠かせない運動だ。競技により、重点的にストレッチする箇所は異なるが、全身を使う空手部の準備運動は、特に時間をかけて行う。

「それじゃ、沙希ちゃん。元気よく頑張ってみようか！加藤は、お手本な！」

加藤は「はい！」と、前に躍り出て、沙希の隣に直立する。

沙希と加藤が前に出て、三人がそれを正面から鑑賞する。

主将の鬼村は、敷いたマットに横たわって、ビールを飲みながら様子を見ている。横にはいくつも転がった５００ミリの缶が散乱している。

「加藤、まずは簡単なやつから始めろよ」

稲村の号令に、加藤は「はい！」と、両膝に手を当てる。

「まずは屈伸から、始めます！！うぃっち、にぃ…」

加藤が勢い良く膝の曲げ伸ばしを行うと、沙希も続いて膝に手を当て、前屈みになる。

ゴリュ…

「うっ…ぐ…」

極太ディルドは沙希の腹部を圧迫する。

5センチの厚さを持つシリコンの塊は、柔軟性が低く、沙希の姿勢に合わせて形を変えてくれるわけではなう。

結果、前屈みの姿勢になった分だけ、ディルドは沙希の腹部を突き破らんと、より飛び出た形に沙希の腹部に形成する。

「ほら、沙希！しっかり屈伸！」

稲村の掛け声に、沙希は覚悟を決めて膝の曲げ伸ばし運動を行う。

「ふっ…くぅん…んぐ…く…うっ」

ゆっくり膝を降ろし、なるべく体幹をずらさぬよう、慎重に屈伸運動を繰り返す沙希。

「ほえあ、沙希ちゃんも声出せ、声」

「い…いち…ん…にぃ…」

淫靡な悲鳴を押し殺し、なんとか屈伸を終わらせる。

(だ、大丈夫…、身体を固定して動けば…なんとか、なりそう…)

「つぎ、伸脚いきます！」

加藤の号令に、沙希は腰を低く降ろし、脚を開脚して大きく伸ばす。

ゴリュ、ゴリュ…

「く…、ふぅ…」

今度はディルドの先端が、右に伸脚すると、胎内で左に暴れ、左なら右へと、沙希の腹を掻き回す。

「う…うぷ…、こぷ…」

その刺激にこみ上げるものを感じた沙希だったが、その胃袋は、すでに胃液しか残っていない。

ぐっと上を向き、口内に戻った胃液をゴクリと飲み込む。沙希は口端から漏れた一筋の唾液を手で拭う。

「お、いま、ちょっとヤバかったんじゃね？」

笑いながら言う稲村に、沙希は「大丈夫です…」と気丈に返す。

「いいね、根性ある。加藤、つぎ！」

「つぎ！跳躍！」

そう言いながら、道場を直立でピョンピョン飛び跳ねる加藤。

「マジかよ、加藤！ひっひー、はは！」

妙な笑い声を上げる稲村に対し、沙希の表情は蒼白だ。

（うそ…、アレを、やるの？！）

沙希の胎内には、長さ２０センチ、太さ５センチのシリコンのディルドが飲み込まれている。

そしてそれは、紐のパンティに固定され、根本まで深く潜り込んでいる。その紐パンも、沙希の皮膚に食い込むほど強く押さえつけていて、簡単に抜けることは無いだろう。

つまり、跳躍による振動がモロに沙希の胎内全体に掛かってくるのだ。

「ほら、さっさと！両手をピンと、跳ねる！」

稲村の号令に、沙希は意を決して爪先に力を込め、宙へ飛ぶ。

ダンッ…

「ぐが…、く、くぅ〜…」

一回の跳躍で、沙希は動きが止まる。

地面に着地した瞬間、まるでディルドの先端が喉を突き破って飛び出したような感覚を覚えたのだ。

ディルドを中心に全身の臓器に振動が波紋のように広がった感覚を覚え、腰骨、恥骨がビリビリ震える感覚を覚える。

そのまま崩れる沙希を見て、加藤は稲村に、確認する。

「あちゃー…、前後の曲げ伸ばし、どうします？」

「ん～、流石に無理だよな。仕方ないし、サイズを下げるか…」
稲村の発言に意図を理解した草凪は、すぐに沙希の胎内に埋まっているディルドより、サイズを下げた数点を持ってくる。
「これでいいかな？」
稲村が手にしたのは、サイズは小さいが電動で動く、バイブレータの類の玩具だった。
それを手に、うずくまる沙希に近付く稲村。その表情は少し不満気だ。
「ったくさー、このくらいで音を上げちゃ、この先辛いよ？もっと大きいサイズのディルド、あんだから…」
沙希は後ずさって、稲村から逃げようとする。
「ひ、ひぃ…」
「ほら、ほら。これもトレーニングだよ、沙希ちゃん」
距離を取った沙希は、思わず稲村に、いや新生空手部の全員に、問いかける。
「あ、あなた達は、本気で大会に優勝できるつもりなんですか？」

１５　ささやかな反抗と大きな代償③【極太ディルドが胎内で折れ曲がるほどの強キック】

沙希は胎内に埋め込まれた異物の為、動きは緩慢だが、ゆっくり立ち上がり、帯を締め直す。

「あなた達は…いえ、鬼村主将は、私に空手大会で優勝してくれると約束してくれました…」

沙希の発言に、部員達は「え？」という表情や、「ああ、そういや」と思い出したり、それぞれ反応を見せる。

鬼村は酒を飲む手をピタリと止め、横たわった姿勢のまま、動かない。

「で、だからどうしたの？まぁ俺等は強いの知ってるでしょ？」

切り出したのは稲村だった。彼の「まぁ楽勝っしょ」と軽く笑う態度に対し、沙希はキッと睨み返す。

「失礼ですが、先輩。恐らく無理だと思います」

沙希の発言に、全員の表情が変わる。眉間に皺を寄せ、近寄り難い不良の顔になっている。

「大会は団体戦です。１人、２人が勝てても、駄目なんです。そして、鍛え抜かれた選手達を相手に１勝得るのは、並大抵ではありません！」

沙希の表情も、また変わっていた。

陵辱され自身を失い、言われるままの肉の人形ではない、1人の武闘家としての、凛とした表情になっていた。

「私は今日まで、皆さんがまともに練習してる姿を見たことがありません。他校の選手は、その一分一秒を先んじています」

小柄な15歳の少女が吐く気は、部員達を圧倒する。

キョトンとした素の表情になる稲村。
眉間の皺が顔全体を吸い込むほど険しくなる長井。
思わず正座座りになる草凪。

「さ、沙希ちゃん、やだなぁ。そんな、ねぇ。オマ◯コにぶっといディルドを咥え込んで、カッコいいこと言うとかさぁ…」

ふざけた態度で茶化すのは、沙希の隣に居た加藤だ。
その表情は青ざめており、声も少し震えている。

加藤は三人と相対する位置なので、皆が見えていないものが、見えていた。

「き…鬼村さん」

加藤の表情に気付く三人は、後ろを振り返る。
マットを敷いて横たわっていたはずの鬼村が、沙希に向かって、歩み出てきた。

「いや…、鬼村。沙希ちゃんも、言うねぇ…はは…」

同学年の稲村が、鬼村をなだめようと声を掛けるが、鬼村は一瞥することもなく、沙希の正面に立つ。

「」

沙希がもの言おうと口を開く瞬間、鬼村の蹴りが沙希の下腹部に直撃する。

ドガァ！！

その衝撃に、沙希は回転しながら、道場の壁まで飛ばされる。

「ぐあ…あー！」

バキッと気の軋む音を鳴らしながら、壁に跳ね返って倒れる沙希。

さらに近寄ろうとする鬼村を止める稲村に、鬼村は「うるせぇよ」と拳を飛ばす。

パシィ…

稲村の顔面に向かった拳を止めたのは、長井だ。

「鬼村、ちょっと飲みに行こうぜ…」

しばらくの沈黙の後、鬼村は長井に向き返る。

「・・・ああ、そうだな」

◇◇◇

鬼村達が道場を出てしばらく、三人は動くことが出来なかった。

「う…うぐ、ぐ、あぐっ」

沙希のうめき声に、ようやく動いたのは、加藤だった。

「沙希ちゃん、大丈夫…うわ…」

沙希の腹部は、破れんほどの隆起を見せる。

「これ…胎内のディルドが折れ曲がって、ない?」

沙希のヘソの下が、まるで勃起したペ〇スがパンツから隆起しているように見えるほど、大きく盛り上がっている。

「もともと先端が水野のヘソの上だったろ?」

「やべーよ、これ…」

稲村は沙希からディルドを引き抜こうと、沙希の股間に手を入れる。

カリ…カッ…

「ダメだ、深くに入って、取れない…」

もともと20センチもあるディルドを、完全に埋没するまで秘部に押し込んでいたディルドだったが、折れ曲がったことで、さらに奥に動いたようだ。

「ちょ、拡げて…て、これもダメだ…」

そして、彼女の未成熟な女性器は、短い期間での急速な開発によって柔軟性をもたらした。

だが、直径5センチのディルドは、そんな彼女の膣を限界まで拡げていた為、それ以上の余裕も無かった。

「とりあえず、ここじゃヤバいな。アパートに移動するぞ…」

１６　抜けなくなった極太ディルド①【極太ディルド：開脚】

タクシーを降りた三人は、沙希を抱えてアパートに飛び込む。
沙希は意識を失っており、ダランとしている。
「ど、どうします？やはり病院…」
草凪の発言は至極真っ当だが、稲村は当然のように却下する。
「バカ、下手に騒ぎになったら、警察入ってくるぞ…」
沙希を抱えながら、稲村は真っ直ぐに浴室に向かう。
「加藤、浴槽に板を置け。草凪は、例の拘束具…」
そう指示すると、稲村は手際良く沙希を浴槽のフタの上にドカリと置き、彼女の左右の脚を、大開脚の姿勢で拘束する。
浴室の床には、Ｕの字を逆さにして突き刺したような鉄のフックが設置されており、両脚を拡げたまま固定できる仕掛けが付いている。
小柄な沙希に対し、拘束具の設置位置はやや大きく取られており、沙希の両脚は、限界以上に大きく開脚されている。
「う…、あ、な、何を…キャアー」
その痛みに、沙希は覚醒したのだが、自分の状況を理解しきれず、

思わず大声を出す。

「な、何で…く、お腹が…破けるように…痛い…」

お腹を押さえようと手を動かそうとして、ようやく沙希は自分の状態を理解する。

「え…、両手が動かない…脚も…い、嫌ぁ…」

約４０センチ程度の高さの蓋をされた浴槽に、上半身だけ横たわる沙希。その両足は大きく開いて拘束されている。その上半身も、両手を大の字に固定され、全く動くことが出来ない状態だ。

(この格好って、の時の…)

沙希が脳裏に浮かんだのは、オマ◯コに水鉄砲を食らった時の、あの感触である。

「い、嫌、やめて…、アレは許して…」

腰を動かして暴れる沙希。
そこに稲村がそっと顔を近付け、ふっと息を吹きかけて、沙希をなだめる。

「沙希ちゃん、大丈夫。自分が大怪我してるの、分かる…?」

言われて、ふと下腹部の焼けるような痛みの感覚が蘇る。目線を落とすと、自分の腹部が異様に盛り上がってるのが確認できる。

「え…、私のお腹…?ど、どうなって…」

必死に首を起こそうとする沙希だが、しっかり拘束され身で、それは叶わない。

代わりに稲村が、沙希の状況を説明する。

「沙希ちゃん、さ。例のディルド、お腹の中で折れ曲がってさ…、たぶん「くの字形」になってると思う」

それを聞いて顔面蒼白になり、ブワッと汗が吹き出す沙希。

「それで、今からディルドを抜くから、沙希ちゃんも協力して欲しいんだ」

「き…協力、ですか？」

全身拘束されている状態で、何を協力すれば良いのだろうと、沙希はそう思った。

「まず、力を抜いて…抜きっぱなしに…」

稲村がそう言うと、沙希のオマ◯コを、ぐぐっと大きく割り開く。

「ひうっ！！」

「はい、力を抜く」

沙希は「す、すみません…」と、言われた通りに下半身に入った力を脱力する。

「沙希ちゃん、もっと力を抜いて。入口が…狭いな」

稲村が沙希の小陰唇を大きく引っ張ると、徐々に黒光りするディルドが見えてくる。

が、彼女の「入口」に対し、奥に入ったディルドはあまりに大きく、指の入る隙間もない。

「稲村さん、強引に隙間を作ってみたら、どうでしょう？」

「ん…くぅ…」

草凪が沙希の秘部に指を入れると、コツンとディルドの尻が当たる。

そして、草凪は沙希の膣壁を左右にグイと、ゆっくり割り開く。

「い、いや…胎内（なか）が、破れそう…」

「大丈夫…、水野のココは、入口に対して胎内が割と広いから…」

沙希はカァと顔が熱くなる。自分の恥ずかしい場所を、男の人に自分より詳しく知られていることは、耐え難い屈辱を感じる。

（はやく、終わって…）

沙希の願いが通じたのか、草凪は「やりました、掴んだ！」と歓喜の叫びを上げる。

「よし、草凪。そのまま引っ張れ」

草凪が稲村の指示に従い、ぐっと沙希の胎内から、黒光りするシリコンゴムを引き出す。

グリュッ…

沙希のオマ◯コから黒いディルドが1センチほど顔を見せたと同時に、沙希の下腹部に盛り上がった突起…つまり折れ曲がった先端部分も、1センチほどズリっと動く。

「は…はぎぃ！いた、痛い、痛いです！」

沙希の悲鳴に、草凪は手を止める。
沙希のオマ◯コの入り口は、既に限界を超えた拡がりを見せ、裂けんばかりにミチミチと音を立てている。

「どうする？少し曲げて…」

「いや、もう少し手前まで引っ張らないと…」

何か相談が聞こえるが、沙希は自分の腹部が破れそうな痛みに、歯を食いしばって耐えるのに精一杯だ。

「このまま、一気に行ったほうがいい」

稲村の提案により、力で一気に引き抜くことが決まった。そこに、沙希の身体への気遣いは無い。
いや、むしろ多少の負担は大きくとも、苦痛に時間を減らすという気遣いなのかも知れない。

「ま、待って！やめ…止めて！怖い…」

「せーの…」

掛け声とともに、草凪の掴んだディルドは、一気に引き抜かれた。

１７　抜けなくなった極太ディルド②【極太ディルド：開脚】

大の字に浴槽の蓋の上に縛られた沙希は、大きく悲鳴を上げた。

「はぎぃ…あぎゃ、ひゃあ、あー！」

胎内で折れ曲がったディルドが、沙希の腹部に大きくテントを張るように盛り上がっていた。

それが、男の力で強引に、ズズズっと一気に沙希の恥丘まで移動する。

「う、が…お腹が…引き出され…やめっ…ぐっ！」

黒光りするディルドの先端は、沙希のオマ◯コから１０センチほど顔を出していた。

「おお…、沙希ちゃん、おチ◯チンが生えちゃったねぇ」

（な…なに、どうなって…？）

沙希の股間は、まるで黒く逞しい男性器がブランと生えているようだった。

「いや、見方によっちゃ、チ◯コが二本生えてるようにも見える。草凪、ちょっと退いてみ？」

稲村は、草凪を後ろに下がるように命令する。

草凪は「何を呑気な…」と言う言葉を飲み込んで、掴んでいたディルドを離し、後ろへ移動する。

「お、これは、確かに…、すげーエロいですね」

沙希のオマ◯コからブランと垂れ下がったディルドは、まるで勃起するかのようにググッと天井に向かってそそり勃つ。

と、同時に沙希の恥丘あたりの盛り上がりはゆっくり納まってくる。

そして、ズリュ…と音を立てて、沙希の秘部から折れ曲がったディルドが完全に床に抜け落ちる。

ズリュリュ…ヌポンッ！

「はぁ…、ん、んぁ…」

ボトン、と小さくバウンドして、折れ曲がったディルドが浴室の床に回転しながら転がる。

「あ、抜けちゃったよ」

「てか折れ曲がり方が、エグくね？」

ネチャっと濡れた20センチち長のディルドは、その中央で、綺麗に90度に曲がっている。まるでブーメランの形状だ。

「く…んぁ…、はぁ…あ…ぁあ…」

ハァハァと息をする沙希。

稲村達が沙希の秘部を覗き込むと、呼吸に合わせてパクパクとオマ〇コが蠢いている。
そのパックリ開いた胎内は、思ったほど被害は無く、裂傷や出血も見られない。
「いや、女体の神秘…だな」

◇◇◇

裏路地の小さな酒場で、鬼村と長井は酒を飲んでいた。
あまり小綺麗と言えない酒場だが、高校生が例え学生服を着ていても、酒を飲ませてくれる貴重な店だ。
白い道着姿で飲む二人はあまりに目立っていたが、それを絡む者は居ない。もし居たとすれば、それは命知らずというものだろう。
「んで、どうするべや」
長井が鬼村の空のジョッキにビールを注ぐ。
「あ？優勝すりゃいいだけだろ？問題無いんじゃねーの？」
溢れるほど入ったビールを、一気に空ける鬼村。
「そか、なら日程確認しとかないとな。明日、犬山に聞いとくわ…」
「犬山は拳法部で、空手と合併時に引退したろ」
長井は「そか」と、新しいビール瓶の栓を開ける。

「じゃ、誰だっけ？」

「薄井」

「ああ、見たことねーべさ。まあ、いいや…」

長井は鬼村にビールを注ぐと、残ったビールを瓶から直接飲み始める。

「つかさ、長井。お前は水野、あんま犯さねーのな」

「あ？ん、まあな…」

長井は幼女体系の沙希は、いまいち欲情しないと嘯く。

「そういや、お前は中学の妹がいるんだっけな…」

「せめてもう少し大人なら、虐め甲斐もあんだけど」

基本的に嗜虐性の高い長井だが、身内を思わせる相手に、いまいち興が乗らないようだ。

「だったらピアスとかタトゥーとか、大人ぶった感じにすりゃ、よくねーか」

成る程、それなら…とゲラゲラ笑う長井。

「俺はいいんだよ。それより、お前こそ、まだ…難しいか？」

鬼村はビールを飲む手を止め、険しい表情になる。

「医者は、もう機能はしてるって、言ってるんだろ？」

鬼村は昔、路上の喧嘩で男性機能を失う怪我を負っている。それ以来、欲情の捌け口を求め、日々、凶暴性が増していると噂される。

「水野沙希…、生意気言いやがる」

◇◇◇

その頃、沙希のアパートの浴室は、乱交パーティ会場さながら、三人の男を一人の少女が相手をする修羅場のようになっていた。

「あ…あん、いた…、もっと、優しく…」

四つん這いの沙希は、膣に容赦無いピストンを加える稲村に、慈悲の懇願をする。

「駄目だよ、沙希ちゃん。エッチ過ぎるんだもん」

稲村は、沙希の懇願など聞く耳持たず、ガンガンと腰を振って、欲望を吐き出そうとする。

「稲村さん、そろそろ終わりに。水野も辛そうだし…」

沙希に助け舟を出すのは草凪だ。

そのペ◯スは、沙希に右手でシゴいて貰っている。

「いや、沙希ちゃんのオマ◯コは、今はすごい名器なんだよ。もっ

と味合わないと！」

沙希の胎内(なか)は腫れており、その腫れた肉壁が、稲村のペ◯スを熟女のように纏わりつかせる。

（い、痛い…。この男、信じられない…）

沙希の膣内が出血していなかったのは奇跡に近い。

にも関わらず、稲村は沙希のオマ◯コを、容赦なく突いてくる。

「すげぇ！まさに名器！！」

必死で耐える沙希と、心配そうな顔をしつつも、沙希に手でしごかれ、勃起する加藤と草凪。

狂乱の宴は、夜遅くまで続いた。

１８　予選前夜【エロ無し】

翌日の放課後。
道場には、仁王立ちの鬼村、その後ろで話を聞く四人。間に挟むように、沙希は正座して話をする。
「沙希よぉ…。おめーの言う大会って、一般のそれじゃねぇな…」
「…はい」
沙希は正座をしているが、つま先を立てて正座する、跪座と言われる姿勢だ。
無意識だろうが、沙希は唐突な攻撃に反応出来るよう、そのような姿勢になっていると思われる。
「私が幼い時に目にした、八海山高校の大会というのは、「全国高校空手大武闘会」という、いわゆる裏の高校生大会です」
そう語る沙希の姿は凛として、羽織った道着からも泊というだろうか、１５歳の少女と思えぬ貫禄が出ている。
だが、視線を少し落とすと、道着下を履いていない沙希の尻が可愛く覗かせる。
つま先座りのそれは、菊座のみならず、使い込んでるにも関わらず、ぷっくり膨れたあどけない秘部まで露わになる。

「大会は、６月に予選を行い、１０月から大会が本格的に開始されます…」

鬼村は、「ふーん、そか…」と、沙希の話を流す。

「で、沙希。無精の顧問に変わって、お前が参加手続きしたみたいじゃん…」

「…はい」

沙希は重い口調で、認める。
後ろで沙希の尻を眺める面々も、表情は険しいのが分かる。

「お前、明日がその「予選」て、気付いてた…な？」

鬼村の言葉に、沙希は黙って首を縦に振る。
そして、後ろから、動揺のざわめきが聞こえてくる。

「このまま大会を見逃してたら、お前、どうしてた？」

沙希は目線を下げ、俯いて黙る。

(毎日のように犯されて、忘れてた？)
(こんな連中に、私の思い出でもある大会に参加して欲しくなかった？)
(それとも…、なんでだろう？)

沙希自身も、黙っていた理由は分からない。
だが、これが鬼村にとっては許しがたい裏切り行為だとは、沙希は夢にも思わなかった。

「まあいい、とにかく明日は予選なんだな？」

鬼村に問われ、沙希は「はい」と頷く。

「ただし、この予選は、少し特殊なルールです」

「特殊？」

鬼村が「どういうことだ？」と聞き返すと、沙希は一拍置いて、予選の説明をする。

「予選は、ランダムに選ばれた三つの高校と5対5で試合をし、その勝利数で決まります」

「つまり、勝利数を1点とすると、最大で15点が得点出来るわけだ…」

後ろから草凪が分析する。

沙希は振り返ること無く、そのまま話を続ける。

「過去の例から、15勝収めたチームが予選を通過してます」

それを聞き、稲村がため息を出す。

「全員が全勝利…か。なるほどねぇ」

全員がため息をつく中、鬼村だけは静かに殺気を放ち、沙希に問う。

「沙希、もし俺等が予選に落ちたら、どうする？」

「…えっ？」

唐突な質問に、沙希は戸惑う。

「いいぜ、そん時は、俺等は全員、お前の奴隷だ」

そう言いながら、鬼村は懐から紙を出し、沙希の前に投げつける。

「その代わり、俺等が予選突破したら、それをやってもらうぞ…」

沙希は眼の前に投げられた、クシャクシャの紙を広げて確認する。

それは、稚拙なイラストだった。

ただし、どうやら女性の身体を表現しているようで、各部位にアンカーが引かれ、汚い字で何か書かれている。

両乳首ピアス
ラビアピアス
舌ピアス
クリトリスピアス
陰核包皮除去

「な…、なんですか、これは…？！」

紙を持ってワナワナ震える沙希に、長井が答える。

「あ、それな。俺が沙希に欲情するには、ちょっと雰囲気をアブノーマルにしたいって、ジョークで話していたんだべ」

（これを…本当に、やれと…？）

沙希は気を失いそうになる。

「俺等が予選に落ちたら、約束は守ってやる。だが、リスクはお前も背負って貰わないと…な」

鬼村の約束…

（こいつ等が何処まで約束を守るか分からないけど…）

沙希は、彼らが実力に自信を持っていることを知っている。その自信が失われて、今まで通りの態度が取れるだろうか？

（それに、鬼村主将や長井副主将はともかく、他の部員まで全勝利は、まず無理…）

沙希は、大きく息を吸い、ゆっくり吐く。そして、鬼村の目を見て、はっきり告げる。

「分かりました。明日の予選を通過したら、言う通りにします…」

沙希の中に、これで陵辱の日々から解放されると、心に少し光が灯ったような気がした。

１９　機械姦無限地獄①【ピストンマシンディルド（設置）】

沙希は早くから目が覚めていた。

（今日は大会の予選…）

沙希の目標である、空手大会の団体戦。
今日はその、予選の日だ。

（本当は選手として、参加したかった…）

沙希はマネージャーとして、制服にジャージを重ねて、出発の準備をする。

そこへ、五人の男が、沙希の部屋に殴り込むように、押し掛けてくる。

「きゃっ…、な、なに？どうして、ここに？」

時間は朝の七時。
確かに、女子の部屋に来るには、いささか異常な時間だ。

「なに、今日は大事な日だ。ちぃと願掛けを…な」

そういうのは、主将の鬼村だ。
この神など微塵も信じ無さそうな男が願掛けとは、実に似合わないと、沙希は思った。

だがそれ以上に疑問に思ったことを、沙希は鬼村に投げ掛けた。

「どうして、ここへ？」

寺とかなら理解出来るが、早朝から沙希の部屋に来るのは、些か妙だ。

「それは…な、まず脱げよ」

勝利祈願に女性の身体を抱くというのは、昔の武士が決闘の前によく行われていたという。

（ああ、つまり、そういう事か…）

沙希は一瞬躊躇するが、諦めたように、衣類に手を掛ける。

（きっと、これで最後だ。それに…）

沙希が上を脱ぐと、下着のない白い肌が現れ、ピンクの乳首はうっすら固くなっている。

（こいつ等相手なら、飽きるほど犯され、辱められ尽くした。今更、どうということも…）

沙希は心を殺し、スカートのホックを外す。

「抱きたければ、どうぞ…」

沙希は下も脱ぎ捨てると、一糸まとわぬ姿を男達の前に晒す。

「わたしも出来ることは協力します。後で負けた時の言い訳けに、されたくありません」

その姿は堂々したもので、赤面はしているものの、沙希の表情は強く気高いものであった。

「いい覚悟だ、沙希…。加藤、草凪、準備しろ！」

鬼村の号令に、加藤がまず沙希の前に躍り出る。
手には、１００センチはあろう、長い棒を携えてる。

「沙希ちゃん、ちょっと足を開いてね…」

そう言うと、沙希の同意を得ずに、強引に脚を開かせ、棒に固定する。

「ちょ…、なにを？！」

沙希の両足は棒の端と端で、革ベルトの拘束具で固定される。

「よし、水野。ちょっとベッドに横になって…」

草凪が、動けない先を抱え、ベッドに横たわらせる。

仰向けで横になった姿勢は、沙希のオマ◯コは露骨な開脚のせいで、丸見えの状態になる。

沙希は、思わず両手で股間に手をやる。

「だ、抱くなら、普通に抱いて下さい！抵抗する気は、ありません

！」

沙希は思わず娼婦のような言葉を吐くが、それが１５歳の少女と、端で聞いていたら、誰がそう思うだろう？

（大股開きで、こんな恥ずかしい格好…）

「お前が抵抗しないのは、知ってるよ。散々、犯し抜いてきたんだしな」

沙希の股間に当てた手を、稲村はそっとそっと外す。

「このオマ◯コだって、いつもじっくり見させて貰ってるし、今更だよね」

沙希の陰唇を左右にクパクパ開きながら、稲村は言う。

「…くっ」

稲村の言うとおりだ。この数週間、沙希はこの男達に散々慰み者にされてきた。

「じ…じゃあ、なぜ、こんなことを…？」

「沙希、こんな話を知ってるか？昔、恋人の勝利を願った女が、願掛けに冷水を浴び続けたってのを」

（水垢離のこと？）

鬼村がそう説明を始める。その間も、加藤と草凪は沙希の拘束具を

セッティングしていく。

（あ…、両手まで…、バンザイみたいなポーズ…）

沙希は両手を大の字にベッドに縛られる。

「そんで、だ。女は男が帰って来るまで、ひたすら冷水を浴びて、男の帰りを待った…つー話」

沙希の両脚を拘束している棒は、足側のベッド柵に掛けられる。

（あ…、腰が、浮いちゃう…）

草凪はロープを使って、ベッド柵と両脚を拘束する棒を結ぶと、沙希の脚はベッド柵の高さまで持ち上がり、固定される。

結果、沙希は、両脚を限界まで左右に開いたまま、身動きが取れなくなる。

「こ、こんな格好…や、やだ、止めて下さい！」

腰を動かして、必死に縛めから逃れようとする沙希。しかし、僅かしか体が動かせず、拘束の強さを実感する。

沙希が混乱している中、その股間にヒンヤリとした感触を覚え、身体をビクンと痙攣させる。

「な、なに…したんですか？！」

「はーい、沙希ちゃん、動かない」

沙希は、身に覚えのある感触が、その胎内に冷たいローションと共に奥深く入っていくのが分かり、腰を引こうと思わず藻掻いてしまう。

「な、な…に？」

首を精一杯伸ばして股間を見ると、稲村が何かドリルのような工具を持っている。

「な、なんですか、その機械…は？」

20　機械姦無限地獄②【ピストンマシンディルド】

稲村が持っているのは、電動ドリルのような工具だったが、その先端に取り付けられているのは、あの禍々しいシリコンゴムのディルドだ。

（色は違うけど…大きさは…ひぅっ！）

ディルドの先端が沙希の子宮口を小突くと、沙希は身体をを大きく仰け反らせる。

（やっぱり…この前のディルドと、ほぼ同じ…いえ、少し小さいかも…）

沙希が感じた通り、そのディルドは４．５センチと、若干サイズは下げられているが、その分をイボのような突起が生えてるので、圧迫感はさほど変わらない。

「や、やだ！止めて…解いて！」

稲村が、機械をまるで機関銃を設置するかのように、固定する。

そして、草凪は沙希の口に、ボールギャグという拘束具を嵌める。

「う…んぐ、んぉっ！」

いわゆる口枷のようなものを嵌められ、喋ることはおろか、叫んだり大声を出すことも出来なくなる。

（な、喋れない…）

「沙希ちゃん、説明するね。これはピストンディルドマシーンて、海外で作られた機械なんだ」

（ピストンディルド…、ピストンて、確か…）

沙希が意味を理解する前に、稲村は機械のスイッチをオンにする。

ウィィーン…ガッシャ…ガッシャ…

鈍い機械音が鳴り、沙希の胎内をギチギチに支配していたディルドは、前後運動をゆっくりと開始する。

（な、胎内で、前後運動を…）

「で、こいつは輸入品だけど、機能豊富でね…」

「…あ、稲村さん、そろそろ出ないと時間っすよ？」

稲村は説明を続けようとするも、試合に間に合わなくなるという理由で、中断する。

「ま、機能は使ってるうちに、分かるよ。それじゃ、夕方には戻るからね」

五人はガヤガヤと部屋を出る。

「おっと、今日は蒸すからね…」

稲村がすっと指を指す方向に、草凪は小走りで近寄る。その先は窓だった。

「このくらいまで開けておけば、いいですか？」

（あ…開ける…って？何を言って…？）

草凪の言葉を聞いて沙希は思考を戻そうとするが、機械的な動きをするディルドが、沙希の胎内を前後運動でえぐり擦り、思考を途切れさせる。

ガコン、グチュ、グチュ…

「む…むぅん…おぅ！」
（だ、駄目…何も考えられない…）

「じゃ、沙希ちゃん、頑張ってね！」

「う…んぐー、ぐぅ、むぐぅ…」
（ま、待って…、本気でこのまま…？！）

沙希はチラリと時計を見ると、その針は「8時12分」を指している。

大会の時間を考えると、確かにあまり時間が無い。
つまり、本当に夕方まで五人は戻らない、いや戻れないことを意味する。

ズッチュ、ズッチュ、ズッチュ…

（う…あ、これを…夕方まで…）

夕方とは曖昧だが、早くて17時。遅ければ21時かもしれない。

（つまり…あぁ…9時間から12時間、ずっと…んあっ…）

すると、唐突に部屋の窓が全開になる。

外から流れる風が、沙希の熱く濡れた秘部を優しく撫でる。

「…ん、んぐっ？」

違和感を感じた沙希は、風の流れの元を確認する。

（う、嘘？！窓が全開…、しかもカーテンも？！）

沙希の部屋は一階だが、、窓は裏に面しており、人通りは殆ど無い。

（でも、今日は…日曜日…あぅっ）

ガシュガシュガシュガシュ…

ディルドのピストンが、やや早くなる。

「ぐぅ～っ！んぐ、むごー」

（やだ、さっきと動きが…、やだ、この動きは…）

機械は、動きは早くなったが、ピストン幅はやや浅くなった。

つまり、沙希の秘所の入り口を、小刻みにズンズンと刺激している。

ディルドの突起のザラザラ感が沙希の膣壁の浅い部分を削り、甘い刺激を与える。

（そ…そこ…、これ以上…、だめ…）

ヌチュ…ヌチュ…、ガコン…

沙希が昇り詰めようとした矢先、機械はゆっくり動きになり、やがて完全に動きが止まる。

（え…、止まった…？！まさか、機械が壊れた…？）

沙希はホッとしたような、或いは少し物足りないような、複雑な気持ちになる。

ガコン…

（…え？また…動き出した？！）

「ん？！んぐ…、むぅ！？」

今度は沙希の子宮口を圧迫するくらい奥深くまで抉（えぐ）ると、そのディルドはグルグル回転する。

ギュルギュルギュルギュルギュルギュル…

「ふぐっ！？む、んむー！！」

（これ…、うそ？！お胎内（なか）が…全体が…）

絶頂寸前まで昇り詰め、その火照った身体を一旦冷ます。そして、子宮口を圧迫しながらの高速回転。

（こ、壊れる…、何か…身体が…）

ギュルギュルギュルギュル…ヌポン…

「んぐーーーーー！！」

沙希は今迄に無い、大きな声を上げる。

（うそ…、子宮に…何か、異物感が…）

ディルドは高速回転することで、圧迫されていた沙希の子宮口はドリルでこじ開けられるかの如く、その先端を子宮内に潜り込ませていた。

（う…うそ、子宮口が大きく拡げられてるのが、わかる…）

その間も、ディルドの回転は止まること無く、膣全体…いや、子宮まで蹂躙する。

ギュルギュルギュルギュルギュルギュル…

「ふごー！んぁ、がぷっ…むがっ！」

必死に腰を上下に動かすも、逃げることが叶わない沙希。

（無理…、もう、無理！頭が…真っ白に…）

ギュルギュルギュル…ジュポンッ！！

その瞬間、沙希の秘所から一気にディルドが引き抜かれる。
すると、開き切った沙希のオマ◯コ…いや、開き切った沙希の子宮口の、その奥にまで、外からの風がヒュオッと吹き込む。

（あ…、駄目…、でちゃう…、もう…）

プッシュアーーー！！

２１　機械姦無限地獄③【ピストンマシンディルド】

沙希は子宮まで深くディルドで蹂躙され、これまでに無い絶頂を迎える。

その尿道口がプクリと大きく膨らむと、そこから霧吹きのように愛液が噴霧する。

（あ…、出た…、出ちゃった…）

沙希が恍惚の表情で呆然としていると、機械は再びうねりを上げる。

ゴウン…ガチャ…ゴッ、ゴッ、ゴッ…

（うそ…、まだ、逝ったばかり…）

痙攣の続く沙希のオマ◯コにディルドが再び潜り込むと、それは高速回転しながらピストンを繰り返す。

「ん、んぐぅ！ぐっ、ぐぅっ…！」
（な…胎内(なか)が、えぐられ…ちゃう…）

沙希の秘部から出し入れされるそれは、回転を伴って出てくるので、その度に沙希の愛液をまき散らす。

（うそ…、また、来ちゃう…、逝くッ！！）

これまでの乱暴で一方的なＳＥＸと違い、快楽を導くために設計さ

れた機械のそれに、沙希は抗うことは出来ない。

（ま、まだ…8時半…、あいつらが出てから、15分しか…）

沙希は二度目の潮を吹きながら、この地獄が始まったばかりと実感していた。

◇◇◇

電車内では、五人は座っている人を押しのけて、一シートを占領し、目的に向かっていた。

「だからさ、潮ってのは、小便なわけですわ…」

「いや、最近の研究だと、やっぱ潮は尿と成分が違うようで…」

朝の爽やかな電車内で、似つかわしくない話に盛り上がる草凪と加藤。

議題は女の「潮」について、だ。

稲村は興味津々に会話に参加し、長井と鬼村は興味無さそうに、目を閉じて休んでいる。

「この前、風呂で水野が潮吹きまくってたけど、絶対に尿じゃなく…」

潮については実際に未知の部分が多い。

だが、少なくとも沙希はというと、若干、特異な体質と言えるかもしれない。

沙希の膀胱内には、僅かながら愛液を分泌する細胞が点在し、徐々に愛液が溜まる体質である。それが一気に噴出するタイミングは、沙希が本気でオーガズムを感じた時となる。

そして、まさに今、６度目のその現象が、起ころうとしていた…。

◇◇◇

午前９時２６分…

沙希のを犯すディルドは、ゆっくりと、沙希の膣内を愛撫するかのように優しく動いていた。

（あ…、なんか、優しい動きが…いい…）

ザッ、ザッ、ザッ…

沙希がまったりとした甘美を味わっていると、不意に窓の外から、誰かの足音が聞こえた。

「ん…んぐ？！」
（え…、いま、外に誰か居るの？！）

沙希の部屋は一階に配置され、窓はご丁寧にも全開の状態だ。なので、今、人が侵入されたら…

（うそ…、こ、怖い…、見られてるの…？！）

緊張で沙希の全身が強張る。
すると、ディルドは沙希のそんな感情を見透かすように、突如、激

しく動き始める。

ガッショ、ガッショ、ガショ、ガショ…

「む！んぐ、むぐぅ～…んぐぅ！？」

（や…、急に動きが…、誰か見てるかも…しれないのに…）

それまでの優しい動きが、今度は激しいピストン運動に切り替わる。
緊張で締められた沙希の膣を強引にこじ開くディルドは、あっさり
沙希の子宮口まで侵入する。

（や、やだ。こんな、見られてるかもなのに…アソコが熱い…）

グチュ、グチュと沙希の秘部から空気と粘液のかき混ぜる音と、機
械のガコガコ音の中で、外からの足音が徐々に遠くなっていくのが
聞こえる。

（行って、くれたのかしら？もしかして見られて無かった…？）

安堵の沙希は、気が緩む。

「ん…、んふぅ？！」

その一瞬の気の緩みを機械は見逃さなかったのか、突然、動きを変
える。

「ふ…、ふぐっ…んぐっ！！」

（うそ…、胎内(なか)で、折れ曲がって…擦られ…）

ディルドはそのカリ首の部分を、首を持ち上げるかのように大きく

曲げ、沙希のお腹は外からも確認できるほど、持ち上がる。

（あ…これって…、あの時と同じ…）

沙希は、このような「胎内から異物がお腹を突き破らんとする状態」を、すでに最近、経験している。

（痛い…、でも、あの時ほど…）

グチュ、グチュ…

「ふ…んぅ。んふ…ふぉ…んぐっ！」
（あ、痛いけど…、何かジンジンして…）

ディルドがピストンの動きを止め、首を大きく回転させる。
その動きは、さながら「トンボの目を回させるために指先をクルクル動かす動作」とでも形容すべきだろうか。

（あ…、胎内（なか）が拡がっちゃう…）

沙希のお腹がボコボコと、ゆっくり蠢く。その膣口の上、尿道からは、お腹が蠢く度に、まるで射精をするようにドピュ、ドピュッ…と、愛液を吹き出すのだった。

２２　機械姦無限地獄④【ピストンマシンディルド】

ＡＭ１０時…

試合会場は熱気に溢れていた。

「思ったより、派手に開催してますね…」

加藤は会場の大きさに、マイナー大会ならこんなもんだろうとの予想と違ったことに、驚いた。

「そろそろ、気を入れてかないと。なんせ我らがリーダーが、背水の陣を布いてくれちゃったしね」

稲村が後輩に柔らかい叱咤を送る。

「でも、もし仮に全勝ならなかったら、マジに沙希ちゃんに絶対服従とか、守るんで…んぐ？」

加藤の純粋な問いを、草凪が遮る。

「馬鹿、負けた時の事を、今は考えるな…」

草凪がチラリと鬼村を見る。そして、視点がこちらに向いていないことで、聞かれていなかったと、安堵する。

「必勝祈願してんだから、問題ねぇんじゃね？」

ぼそりと鬼村がそう呟くと、加藤と草凪はギクリとなる。弱気に鉄

拳が飛んで来るかと、ヒヤヒヤした。

「そ、そうですよね…。水野に必勝祈願しといたし、負けるわけ無いです！」

慌てて取り繕う草凪の言葉が、鬼村に届いていたかは分からなかった…。

◇◇◇

必勝祈願…。

彼らが行った必勝祈願とは、武士の女房が水垢離(みずこり)を亭主が無事に戻って来るまで続けたように、沙希にもそれを行わせている。

但し、その内容は、固定した沙希の身体をピストンディルドマシンが延々と彼女を攻め続けるという、沙希の意思を完全に無視したものであった。

そしてそれは、今も尚、沙希を攻め続けていた…

既に2桁に及ぶ絶頂の繰り返しは、沙希の精神を確実に蝕んでいた。

ガシュ、ガシュ、ガシュ、ガシュ…

「あ…んぐっ、うっ…うぐ…」

キュイーン…ズズズ…ヌポンッ…

「んあ…、ふぉ…んぐ…」

引き抜かれた沙希の秘所は蜂蜜の瓶をひっくり返したようにドロドロとなり、今また、沙希の膣奥と尿道口からプシュッっと新鮮な密が吐き出される。

（あ、終わった…。また、逝っちゃった…）

沙希は二時間に及ぶ快楽地獄の中で、徐々に機械のパターンを理解してきた。

この機械は一分から五分のランダムに動作が切り替わる。

そして、一定の間隔でディルドが引き抜かれ、沙希に休憩を与えてくれる。

（そ…そろそろ、また…）

蜜を吐きながら、沙希の秘部はディルドを受け入れるように、くぱっと口を開く。

ディルドもその呼吸に合わせてて、ズンッ！と、沙希の膣を突き当たりまで一気に貫く。

「はぉう！！」

１５歳の少女と思わせぬ、淫猥な声で喘ぐ沙希。

ブウゥゥウン…

（あ…、振動が…、今度は低速？）

淡い振動が膣から子宮、恥骨と全体を覆うように包み込む。

（あ…、なんか、優しくて…、いい…）

絶頂に絶頂を繰り返した沙希の身体に、この優しいバイブレーションは、甘い快楽を与えた。

（なんか…、機械なのに、愛情があるみたいな動き…）

クチュ…クチュ…クチュ…

沙希の膣内は蠕動を繰り返し、振動するディルドを包み込む。

（あ…、なんか、子宮が…変な感じに…）

沙希の子宮が降りてきて、ディルドの先端を子宮口が包み込む。

（あ…、なんか、いい…）

すでに沙希は、ポルチオの性感も開発され始めていた。

カチ…ガキュ…

（あ…、また、動きが変わる…、少し強くしてくれると…いいな…）

ディルドの動きが切り替わる音がすると、振動が止まり、小刻みなピストン運動が開始される。

ガガガガガガガ…

「ふ…んぐっ、ふっ、ふぅっ…うぅ～」
（し、子宮に、また…あ、あぁ…来る、来ちゃう！）

沙希の足がピンと伸び、腰を浮かして絶頂すると、尿道から愛液と尿をブレンドした液を、盛大に噴霧する。

「んぁ…あぐ、あ、ああ…うぐっ」
（逝ってる、逝ってるのに、止まって…動かないで…、変に、変になっちゃう…）

エクスタシーの最中に性感を責められ、沙希は狂いそうになる。

「ふご～…うぅ、むぐぉ…」

叫びたくても、口をボールギャグで塞がれており声にならない。出来ることは、腰を浮かして潮を吹くことだけである。

（だ、駄目…、もう、意識が…）

薄れゆく意識の中で、沙希は思い出していた。

（そう言えば、今頃、あいつ等は大会予選…）

沙希は彼等の必勝を祈願していたのか、必敗を祈願していたのか、それは本人自身も分からなかった…

２３　機械姦無限地獄⑤【ピストンマシンディルド】

ザァァァァァ…

外は雨の音が聞こえる…、にわか雨のようだ。

少し吹っかけているのだろうか、開け放しの窓から吹き込んだ雨水が沙希の顔を濡らす。

（あ…、寝てた…？）

気を失っていた沙希は、雨の刺激で目が覚める。

関節の節々が痛いのは、身体を固定されて、動けなくなっているからだろう。

股間からは異物感を感じ、その異物が蠢いているのが分かる。

（ん…まだ、動いてる…。でも…）

沙希の股間には、焦げ茶色の男性器を型どったシリコンゴムのディルドが深々と突き刺さっている。

その動きは、ゆっくり小刻みに、沙希の胎内を優しく愛撫している。

（いま…何時？）

拘束される身体で、唯一動く首を曲げ、時計を目にする。

（13時…）

沙希が気を失って、三時間は経過する。その間、機械が激しく動くこと無く沙希を休まれていたのは、奇跡的な偶然に依るものだろう。

グチュ、グチュ、グチュ、グチュ…

寝ている間も、機械は動きを止めていたわけでは無い。今も尚、低速ピストンで沙希の股間を優しく擦り、子宮口をノックしている。

（なんか…彼の大きさが…丁度良いサイズに収まってくれた…？）

沙希はディルドが少し小さく、沙希のサイズにフィットしてきたと錯覚するが、実際は逆で、沙希の女性器が全体的に、拡張されてきていた。

（雨が冷たいけど…、少しかかるくらいだし…）

むしろ人通りの心配が減って、覗かれる心配が無いと、沙希は少しリラックスする。

（あ…、そろそろ、動きが変わる時間…）

なんなら、少し激しくしてもいいよ…と、沙希はディルドに心のなかで呟く。

ガキッ…ウィーン、ガッ、ガッ、ガッ…

沙希の気持ちに応えるように、機械はピストン速度を増し、亀頭部分をグルグルと回転始める。

「うっ…ぐぅ…んぉ…お！」
（あ、激しく…、動いて…くれてる…）
ディルドが最奥を突くと、それは沙希の子宮口を、まるで餅を捏ねるように練り伸ばす。
そして膣口まで戻ると、しばらく沙希の入り口を回し拡げ、再び最奥へと勢いよく突く。
「んぐぉ…むぐ…むふぅ！」
この動きが五分のほど続くと、今度はピストン速度が最低速に変わる。
ギュン、ギュン、ギュンギュン、ギュンギュンギュンギュン…
「む、むぉ…、んぐっ、くむー！！」
（な、胎内(なか)で、大暴れ…してる？！）
ピストン速度が低速になった代償なのか、ディルドは全体を不規則に大きく揺らす。
「おぅ…！ふぐぉ…くぅ…んあぉー！！」
（なに、これ…？！お腹が、弾ける…膨らんじゃう…）
ディルドがまるで、のたうち回る蛇や鰻のように暴れ回り、沙希の身体は内側からボコボコ膨れていく。
（い、いや…、今、逝ったら…、私、狂っちゃう…）

プシュッ…

一般的に、女性は絶頂に達すると、膣や子宮などの性感帯が大きく痙攣し、徐々に収まってくるという。

その沙希の大きな痙攣が起きている最中も、機械は無慈悲に沙希の胎内を暴れ責め立てる。

「んっ！！んぐぅ、おごっ、ほぅ…あふぅ！！」
（出てる…おしっこ出ちゃってる…、止めて、止めて、止めて、止めてぇ！！）

尿道口から勢い良く吹き出す潮は、暴れるディルドがその出口を圧迫し、塞き止める。

（逝って…、逝ってるのに…、今は、止まって欲しいのに…！！）

いつまでもエクスタシーの痙攣が止まらない不気味な感覚に、沙希は呼吸が出来なくなる。

「おひゅ…ひゅ！しゅぉ…ほひぃ…ふぉ…」

沙希は白目を剥き、ボールギャグで塞がれた口から、ヒューヒューとしか音が出せなくなっていた。

そんな沙希に、無慈悲な機械は動きを緩めることなく、次の動きに入ろうとする。

（さっきまで…優しく…してくれたのに…、でも、あたしがもっと

強くって言ったから…）

通り雨も止み、外は晴れ間が見えてきた。

しかし、沙希の股間からは、未だにプシュプシュと、雨のように潮を吹き、前後運動を繰り返すディルドは奥から溢れる愛液を掻き出していた。

２４　機械姦無限地獄⑥【ピストンマシンディルド】

加藤は苦戦しつつも二勝を収め、今、最後の試合に臨んでいた。

「くそ、この大会の参加者、普通に強ぇじゃん…」

喧嘩に自信のあった加藤だが、一抹の不安…ルールに則った空手大会の上で、どこまで通用するか、この事は常に頭をよぎっていた。

増して一敗も許されないプレッシャーもあり、加藤は拳から爪先まで、緊張で震えている。

ここまで全員が二勝を収めており、少なくともこの試合に勝てば、責任は果たせるはずと、加藤は唇を噛み、気合いを入れた。

◇◇◇

時計は午後の三時を指し、外からは子供の遊ぶ声が聞こえる。

沙希が機械のディルドに犯されはじめ、約八時間が経過し、今も尚、その機械は止むこと無く動き続けている。

グッチョ、グッチョ、グッチョ…ヌポン…

ディルドが完全に引き抜かれると、沙希の秘部はポッカリと口を開けたまま、閉じる様子がない。

沙希はというと、完全に白目を剥いており、反応も殆ど無くなって

いる。
生きていることが確認できるのは、開いたままの沙希の秘部が妖しく蠢き、愛液をポンプのようにドプドプ吹き出しているからだろう。
機械は沙希にしばらくの休息を与えると、再びズブズブと沙希の秘部の最奥まで、その焦げ茶色のディルドを突き立てる。
「…お、んむ…」
（あ…、わたし…、寝てた？それとも、死んでる…？）
刺激に覚醒する沙希だったが、全身が麻痺しているように感覚を失われ、頭はなんだかフワフワしている。
ジュプ…、ヌプ…
ディルドのピストンに僅かに反応を見せる沙希だが、その膣は、まるで豆腐に刺すように太いディルドを簡単に飲み込んでいく。
ドッ…ドッ…ドッドッドッドッ…
機械のピストン運動は徐々に早くなり、最高速で沙希の子宮口…いや、さらにその奥、子宮の底までドスドスと叩きつける。
ドドドドドドドドッ
削岩機のように沙希の胎内(なか)を、高速で削るディルドにも、沙希はもはや反応を見せない。
（なんか…動いてる…。けど、下半身が痺れて…何も感じない…）

その筈なのに、沙希の下半身は愛液が止むこと無く溢れ出し、潤滑油のようにディルドを濡らす。

（あ…、お腹…、なんか動いてる…）

沙希は自分の腹部がボコボコと蠢くのを、ぼぉっと眺めていた。まるで、これが自分の腹という認識をしていないように…。

ガガガガガガガ…カシュン…

機械の止まる音が聞こえると、ディルドは沙希の胎内から勢い良くヌポンッ！と音を立てて引き抜かれる

「ん…、んむ、くぅ…」

ディルドが引き抜かれると、沙希は塞がれた口の隙間から大きく息を吸う。

開き切った沙希の秘部は外気が入り、膣壁や子宮口に塗りたくられた愛液を冷やす。

その瞬間、沙希の膣壁は一気に麻痺から痺れに変わり、全神経が剥き出しになったように錯覚する。

ドブッ…

「ぐ…！んひっ！！」

その刹那を見逃さないように、機械のディルドは無慈悲に沙希の秘部を奥まで貫く。

「あぐっ！　ひくぅ！！」

拘束された足を精一杯に伸ばすと、沙希は何度目か分からない絶頂を迎える。

ギュル…ギュルギュルギュルギュル…

「んひっ、ふぁ、ふわざ…い…、いぎぃ！！」
（ま、まわさないで…、回転は、止めてぇ！！）

機械の高速回転は、沙希の膣内から剥き出した神経を容赦なく削り取る。

まるで膣内の肉壁を削り落とされ、神経を直接触られているように沙希は錯覚する。

ドピュッ…ドプッ、ドピュッ…

沙希の尿道から、まるで精液のように濃い粘液が水鉄砲のように吐き出される。

（と、止まらない！！おしっこ止まらない…あぁ…）

虫歯の治療で神経を直接触られるような、強い刺激を膣内に受け、沙希は再び意識が飛びそうになる。

その神経が剥き出したような痺れが納まるまで、実に5分。

その間に沙希が絶頂した回数は7回だった。

そして、再び沙希の膣は感覚を失い、沙希に休みを与えてくれる。

薄れ行く意識の中で、沙希が何を想っていたかは、沙希自身にも分からなかった。

部屋には時計の音と機械の音、そしてネチャネチャと粘液を掻き混ぜる卑猥な音だけが響いていた。

２５　悪夢の奴隷装飾①【ピアス】

沙希が目を覚ましたのは、深夜の２時だった。
拘束は解かれ、例の機械もそこには無い。
例の機械・・・
ピストンディルドマシーンのことだ。
朝からこの機械によって責められていた沙希は、気絶と覚醒を繰り返し、今の時間に至る。
長い拘束により、沙希はまず最初に関節の痛みを感じた。腕を曲げると関節からバキッと音がなる。
「・・・いたっ」
四肢の関節からパキパキと鳴る音と痛みが徐々に薄れると、次に感じたのは手首の痺れだった。
長い拘束で血流が悪くなったのかもしれないと、沙希は自身の手首を軽くもむ。
少し楽になった沙希は、その腕をゆっくりと、そして慎重に、自身の女性器に触れてみる。
胎内に異物が納まっているような、それでいて腫れぼったい塊が膣壁に埋まっているような、なんとも言えない違和感がそこにあったからだ。

（まだ・・・じんじんする・・・）

もしかしたら、まだディルドが胎内に埋め込まれているのかもと、沙希は確認のために指を膣内に埋めようとする。

「・・・え？！」

指が若干腫れて紅くなっている膣内に潜り込む前に、沙希は思わず手を引っ込める。

「う・・・うそ・・・？　なんで・・・」

沙希の秘唇は2対の、つまり４つのピアスに装飾されている。
恐る恐る沙希はそれに触れると、鋭い痛みが電流のように流れる。

「いぎっ！」

思わず苦痛の声を上げる沙希。
もう一度触れて確認しようと手を伸ばすと、沙希は股間にもうひとつの違和感を覚える。

「う、うそ・・・」

沙希の小さかったクリトリスは小指大に膨れ上がり、その包皮は根元から除去されている。

違和感はそれだけじゃない。
まず、一瞬触れた感触から、その陰核に縦に一直線のピアスが貫かれているようだ。

だが、その違和感とは違う、もうひとつの違和感。

何か、別の物が生えているような、異様な感触がそこにある。

（わ、わたしの体に、何が起きてるの？！）

暗がりでの確認で、何かの間違いだろう・・・。

沙希は状況を一刻も早く確認しなくてはと、明かりを探そうとベッドから降りる。

幸いにもブランケットがあったので、それを体に巻いて身を包む。

「いたっ・・・」

布と胸のピアスが擦れて、電流のような痛みを生む。

（胸もピアスが・・・）

沙希が胸の違和感の正体に気付いたとき、どこからか、大笑いや怒声が聞こえる。

「「「ぎゃっはははは・・・」」」

笑い声は下から聞こえ響いてくる。

「この声は、あいつら・・・」

沙希は目を細めて僅かな光を見つけると、手探りでその方向に歩き出す。

キィ・・・

施錠のないドアに触れたようで、そのままドアの向こうは薄暗い廊下を映し出す。

「ここ、2階かしら？」

沙希は音の方に、ゆっくり進む。

（人の気配・・・、やっぱりこんなところにも住民はいるのかしら？）

音を立てないよう気を付けながら、階段まで着くと、いよいよ笑い声は大きくなる。

きっと、あいつらが宴会でもしているんだろう。

（やっぱり、戻ろう。自分がどんな状態とか、どうでもいい。どうせ、ろくでもない・・・）

そう思い引き返そうとしたところを、男の手が沙希の華奢な腕をぐっと掴む。

「おっと、目が覚めたね、沙希ちゃん。こっちへおいで・・・」

稲村は沙希の腕を強引に引っ張り、彼等の宴会場に引きずり込む。

２６　悪夢の奴隷装飾②【ピアス】

「おお、沙希ぃ！やっと起きたか！」

沙希が状況も分からず宴会場に放り込まれると、長井は怒鳴るように、つばを飛ばして沙希を歓迎する。

「ほれほれ沙希ちゃん、脱いだ、脱いだ」

稲村は沙希のブランケットを引き剥がす。

すると、一糸まとわぬ沙希の裸体が一堂の前に晒される。

「い、いやっ・・・！」

沙希が両腕で胸と秘部を隠そうとすると、稲村はそれを阻止するように、沙希の両腕を掴む。

「おお、いいじゃねーか、なあ？」

長井は沙希を指差して、ゲタゲタ笑う。

「いいじゃん、沙希・・・」

鬼村もフン・・・と笑みを浮かべると、稲村に鏡を持ってくるように命令する。

稲村は沙希の腕を離し、鏡を取りに場を外す。

沙希は、自由になった両手を胸に持ってくる。

「ほれほれ、沙希ちゃん。これが今の沙希ちゃんだよ」

稲村が大きな姿見の鏡を持ってくると、沙希は改めて自分の姿に驚愕する。

「それじゃ、上から解説させてもらいまーす・・・」

稲村がヘラヘラした態度で沙希の身体を解説する。

「まず舌。はい、沙希ちゃん、口開けて」

沙希が戸惑いながらも、口を開けると、稲村はそこに指を突っ込む。

「んぐ・・・、あぅ？」

沙希は戸惑うも、慌てて口を閉じぬよう気を付ける。フェラで歯を立てないよう教育されていたので、不意に何かが口に入ってても自然とそうするようになっていたからだ。

「さて1つ目・・・、舌ピアス！」

稲村が器用に指を絡めると、沙希の口内から可愛い舌が引きずり出される。

「ん、っあ・・・」

稲村の親指が、沙希の舌に付けられたバーベルのピアスをクリクリ動かす。

「や、やめれ・・・んぁ・・・」

沙希は口の中の違和感は、ずっとボールギャグという口枷をされていたことが原因と思っていた。

（い、意識のない相手に・・・こんな危険なこと）

舌にこんなこちをすれば、腫れて喉を詰まらせたり、唾液が多量に分泌されて窒息の危険もある。

だが、この男達はそこまで配慮する思考が無いのだと、沙希は改めて恐怖する。

「さて、目線を下にさがって、定番の乳首ピアス！」

稲村は沙希に手を後ろに組むよう命令し、沙希も仕方無しにそれに従う。

「発育途上の沙希ちゃんの小さい胸。これにピアスを施して、大人の雰囲気を演出してまーす！」

稲村の手は沙希の乳房に移り、鷲掴みにする。
そして人差し指をピアスの輪に絡め、乳首を伸ばすように強く引っ張る。

「い、いたい！やめて・・・ください！」

刺したばかりのピアス穴から一筋の血が流れる。

「おっと、ごめんね～、沙希ちゃん」

稲村は沙希の乳首のピアスから手を離す。
その態度に悪びれた様子は一切ない。

「さて沙希ちゃんの胸は発育途上のちっぱいですので、乳首もまだまだ小さいので、ピアスは乳輪に付けさせて頂きました」

言いながら、稲村は乳房を掴み、乳首を根元から絞り出すように握る。

沙希は屈辱の表情で、下唇を噛んでいる。

「ちなみに今回、豊乳になるお薬も入れさせて頂きました。いや、今後が楽しみです」

稲村は沙希の乳房を鷲掴み、ぐるぐる回しながら解説する。

だが、それを聞いた沙希は、顔を青くして振り返る。

「わ、私の身体に、何をしたんですか？！」

稲村は振り返った沙希の肩を掴み、力ずくで正面に向き直させる。

「大丈夫、だーいじょうぶ。発育を良くするホルモン剤みたいなもんだし、成長をちょっと手助けするだけだよ・・・」

ピアスなどの装飾はまだしも、体内に何かを入れられるという行為は、沙希にとてつもない恐怖を与えた。

（わたしが・・・、わたしで無くなっちゃう・・・）

２７　悪夢の奴隷装飾③【ピアス】

稲村から乳房に薬を打たれたと聞いた沙希は、恐怖でわなわなと床に崩れる。

自分の身体が変えられる・・・
得体のしれない恐怖が沙希を支配する。

「オラァ、沙希！さっさと立てや！頭で手を組んで、よく見せるんだよ！」

加藤の怒号に、沙希はびくっと緊張する。
そこをフォローに入るのは稲村だった。

「だからぁ、大丈夫！ちょっと胸が大きくなる成長促進剤だから・・・」

言いながら稲村は、自分のベルトをシュルっと抜いて、後ろに組ませた沙希の両手首に巻きつける。

「きゃっ、いやっ、やめて！」

嫌がる沙希を強引に立たせると、稲村は沙希の手首に巻いたベルトを上に掲げる。

「いやぁ！い、いたい！痛い、痛い！」

小柄な沙希の体が宙に浮き、長身の稲村の顔の高さまで引き上げら

れる。

「ほら、ちゃんと立って・・・」

稲村が沙希の耳元で小さく囁くと、沙希も観念し、大人しくなる。

沙希は地面に降ろされると、縛られた両手をそのまま頭に組んで直立する。

その表情は、痛みと屈辱でぐしゃぐしゃになっている。

「さて、と。どこまで解説したかな？」

稲村が視線を沙希の乳房から下に落とすと、その小さいヘソにもピアスが光る。

「はい、次は定番のヘソピアスです」

特筆すべきことも無いようで、稲村の説明もぞんざいに済まされる。

稲村は沙希のヘソを突いていた指をそのまま下に、ズリズリとなぞるように降ろす。

「そして、その下には、『淫紋』を彫り込んでおります」

稲村の指は下腹部の、ちょうど沙希の子宮に当たる場所で止まる。

「ほ、彫り込んで・・・！？　い、いやぁ！」

沙希は自分の肌に墨を入れられた事実を知り、驚愕する。

「い、いやだ・・・、そんなの・・・」

沙希はいますぐに指で下腹部を掻きむしりたい衝動に駆られるが、後手を組んでいる状況ではそれも叶わない。

「ただし、今回はシールなので、一週間で落ちちゃうね・・・」

「え・・・、シール・・・？」

確かに入れ墨を入れれば、もっと痛みを伴うはずと、沙希は少しだけ冷静になる。

「いずれ本物のタトゥーを施してあげるけど、いろんなシールを試してから、決めようねー」

稲村はシールを撫でながら、沙希の耳元でそう呟く。

(気持ち悪いデザイン・・・)

タトゥーは沙希の子宮の位置を示しているようで、遠目にレントゲンで透かしたように見えなくもない。

沙希は改めて、自分の身体を鏡で確認する。

その両乳首はリング状のピアスがぶら下がり、ヘソにはバーベルピアス。

下腹部は「淫紋」と言われる、子宮や膣の位置や形状を模したデザインの入れ墨シール。

舌を出せば、キラリと光るピアスの玉・・・

更に、話だと自分の胸にも栄養剤を入れられたと聞くので、今後、このおっぱいにも変化が起こるだろう。

（こんなの、酷すぎる・・・どうして・・・）

何故、このような真似をするのか、その答えを沙希は思い出す。彼等は予選を突破したのだ。

そして、彼等が予選を突破したときの約束、それこそが、このピアスだったことを、沙希は思い出した。

２８　悪夢の奴隷装飾④【ピアス】

そろそろ夜が明けそうな時間となるも、宴会場となった共有食堂の賑わいは、止む気配が無い。

それも仕方のないことだ。何せ、全裸の少女が全身に卑猥な装飾を施した姿で、今ここにお目見えしているのだ。

その少女は頭で手を組み、身を隠す術は一切無い。

「さて、いよいよ、沙希ちゃん改造計画もクライマックスにして、最大の魅せ場となります」

稲村が揚々と声を上げると、沙希の身体にも緊張が走る。

これまで、舌のピアスを皮切りに、徐々に下に降りて解説されている。

沙希はその様子を鏡で確認させられ、改めて羞恥と恐怖を覚える。

そして、暗がりで触れた際に感じた、もっともおぞましい恐怖と不安が、いま白日に晒されるのだ。

（見るのが、怖い・・・）

沙希の不安と恐怖など、この連中にはお構い無しと言うことは、沙希は十分自覚している。

「オラァ、沙希！もっと股開けや！」

怒声を上げるのは長井だ。

「まぁまぁ、焦りなさんな」

飄々とした態度で、稲村は沙希の後ろに立つ。

「さーて、本日のメインディッシュ！」

稲村はそう叫ぶと、沙希の両腿(りょうもも)を抱え、その両足を抱えるように持ち上げる。

「あ・・・、いやぁ！」

沙希は稲村に抱えられ、その卑猥なオマ〇コが長井や鬼村の目線の高さに持ち上げられる。

「ひゃーはっはっ！無様なマ〇コになったなぁ！」

「さて、説明を・・・て、この状態じゃ説明できねーな・・・」

稲村は沙希を後ろから抱えた姿勢のため、どうやって解説しようか、少し考える。

その様子を黙って見ていた鬼村が、空缶を床に投げつける。

カァン・・ゴンッ

「う・・・い、いてて・・・うぷっ」

空缶の落下地点は、加藤と草薙の頭だ。

「な、なんで・・・すか、うぷっ、鬼村さん・・・」

青い顔で草薙が鬼村に伺いを立てる。
その様子から、相当な量の酒を飲んでいることが容易に伺える。
いや、おそらくは飲んだのではなく、飲まされたといった様子だ。

「おめーら、ちょっと稲村と変われ」

そう鬼村に指示された二人はフラフラと稲村に向き直る。

「う、うぉっ、オマ◯コ?！」

二人の眼前に、卑猥な女性器が飛び込む。

「いやぁ、み、見ない・・・で・・・」

掠れるような声で叫ぶ沙希。

「いやぁ・・・、こりゃ、スゴイっすね」

加藤は目をこすり、草薙は口元のよだれを拭いながら、沙希の女性器を舐めるようにじっくり眺める。

「これ、ドクターKが施術したんですか？」

草薙は沙希のオマ◯コを指差して、稲村に尋ねる。

「ああ、春日さん、な。あの人は医大を１０回受験失敗して親に勘当されたから、知識だけは持ってるんだよな」

「いやぁ、エグいっすね・・・」

まじまじ沙希のオマ◯コを見つめる加藤に、再び缶のビールが飛んでくる。

ゴンッ

「い、痛ぇ！」

振り返ると、今度は長井が缶ビールを投げつけていたことが分かる。

「てめぇ等、さっさと稲村と交代すんだよ！いつまで上級生に荷物を持たせてやがる！」

長井の怒声に、慌てて草薙と加藤は稲村に謝罪する。

「す、すんません！いま、変わります！」

言いながら、加藤は右脚、草薙は左脚を抱える。

しかし、相当な量の酒を飲まされている二人は、フラフラと足下がおぼつかず、支えられている沙希は不安を覚える。

しかし、沙希はそれ以上に、長井に言われた「荷物」という言葉が小さく胸に刺さっていた。

(私が荷物・・・、私は人ですら、ないの？)

そんな沙希の気持ちに稲村が気付く訳もなく、先の前に躍り出ると、再び解説を再回する。

「さーて、お待たせしました！いよいよ、オマ〇コの状態の解説を始めたいと思います」

２９　悪夢の奴隷装飾⑤【ピアス：性器改造】★

沙希は全裸の状態で、草薙と加藤に両脚を抱えられている為、皆の目線の高さに大開脚した沙希のオマ〇コが、露骨に公開されている。

<ｉ８３１４１７｜４３４０２>

そして、沙希はそれを隠そうにも、両手を頭の後ろで縛られており、動かす事もできない。
もっとも、手が自由になったところで、見られないように隠すことなど叶わないわけだが。

「さて、沙希ちゃんの人体改造は、いよいよクライマックス。ここで、改めてここまでの経緯を説明しましょう！」

稲村の調子に乗った解説に、長井は瓶を投げつける。
それを稲村は、涼しい顔でパシと受け取る。

「ギャハハ、勿体つけんじゃねーぞ！」

稲村は受け取った瓶をマイクのように口元に、揚々と解説を始める。

「今年の春に入学した、地方から遥々と出てきた少女の沙希ちゃん。水野沙希という少女は、実家では道場経営する両親に育てられ・・・道場でいいんだよね？
そして、この高校を大会優勝に導かんと野心を持って、空手部の門を叩いたのでした！」

「稲村ァ、巻いていけ、巻いて！」

長井の怒声に、稲村は「はい、はい」と流す。

一方で沙希を支える加藤と草薙は、深酔いのせいで足下がおぼつかず、沙希を持ち上げるのにひと苦労といった様子だ。

いや、子犬のように軽い沙希を持ち上げるのが大変なのではなく、立っていることそのものが・・・という感じだろうか。

「で、上から『舌』『乳首』『ヘソ』『淫紋』と説明を終え、いよいよオマ〇コの改造の説明です！」

稲村は沙希の身体を、上から指差してズーッと下まで降ろす。

「これらの施術はドクターKこと医大１０浪正の春日サンの最高傑作とのこと！」

◇◇◇

沙希の目覚める一時間前・・・

「一応、執刀は終わったけど、長井の坊ちゃん、本当に良かったのかい？」

マスクの男は心配そうに声を掛ける。

「賭けは、賭けだ。文句言わせねーよ」

「いや、文句とかじゃなく、あんな小さい子供に、一生残るオペをして、人権問題とか児童虐待とか・・・」

鬼村は何も言わず、黙ってマスクの男の胸ぐらをグイッと掴む。
「春日さん、よぉ。なんの為に家賃を待ってやってるか、分かってる？」
マスクの男・・・春日は親からの仕送りも途絶え、流れ流れてこのアパートで雨風を凌いでいる。
その収入も細く、度々家賃を捻出出来ずにいる春日は、鬼村の命令には逆らえない負い目があった。
「んで？注文通り、やったのかよ？」
「ええ・・・、あの子は施術中もピクリとも動きませんでしたよ、よほど疲れていたんでしょう」
春日の答えに鬼村は更に苛立ち、掴んだ春日の胸ぐらを強く持ち上げる。
「ぐぇっ、苦しい、苦しい・・・」
「聞かれたことに答えろっつーの。いいよ、見せてみろ」
鬼村はそう言うと、春日を地面に放り部屋に入る。
部屋にはベッドがひとつ置かれており、それ以外は何も無い。
沙希はそのベッドに横たわり、気を失ったように眠っている。
沙希にかけられたシーツが、彼女の呼吸に合わせ上下する。
「シーツとか血だらけじゃん・・・、こんな腕だから１０浪すんだ

よ、春日サン」

鬼村は、そう言いながら沙希のシーツを乱暴に引っ剥がす。

沙希の状態を確認する鬼村は、ニヤリと笑みを浮かべると、春日にボソリと呟く。

「・・・春日サン、やっぱアンタ、名医だよ」

３０　悪夢の奴隷装飾⑥【ピアス：性器改造（陰核包皮除去：陰核茎部露出）】★

昏睡状態で横たわる沙希の身体は、１５歳の少女に似つかわしくない、淫靡な状態であった。

「一応、渡されたメモの通りにやったけど、とにかく字が汚いから・・・」

春日はそう言いながら、施術の説明を鬼村に始める。

<i８３３８０１－４３４０２>

「まず舌ピアス。
これはバーベルピアスで下の真ん中で貫通してます。
乳首ピアスは、乳頭がまだ小さくて割けるリスクもあるので、根本・・・乳輪から貫いてます。
乳房の発育を良くする薬も、軟膏ですが、よく刷り込んでおきましたので、これは定期的に塗り直して下さい。
ヘソピアスは・・・」

春日の説明に鬼村はフンフンと、適当に流すように聞く。

「春日サンさぁ、その説明はいいから、コッチ頼むよ」

鬼村はそう言うと、沙希の秘部・・・すなわちオマ〇コを指す。
春日はやや不満気な表情になるが、渋々とそれに従う。

「まぁ、ここが一番大変でしたので、詳しく説明しますよ」

言いながら、春日は沙希の両脚を大きく割り開く。
沙希は「ん・・・」と声を出すも、それ以上動く気配は無い。よほど疲れているのだろう。
「ピアスを４枚。これは陰唇に付けてますね。４枚にすることで、ほら、引っ張ると均等に力が加わり、綺麗に奥までクパっと開く事が出来ます・・・」
春日が沙希の陰唇に付けられたリングピアスに指を通すと、手を広げて引っ張る。
ニチャ・・・クパァ・・・
卑猥な音と共に、沙希の秘部は大きく割り開かれる。
「・・・今は膣壁が腫れて見えませんが、治れば子宮口まで、よく見えるようになると思いますよ」
沙希の膣内は紅く腫れ、あちこちにコブ状の凝りが出来ているのが、よく確認出来る。
「一応、ここも軟膏で処置してますが、暫くは使わないほうが良いと思います・・・」
「ああ、ムダとは思うが、長井に言っておくわ」
鬼村の返事に、春日はやや残念な表情になっている事が、マスクをしていても伝わってくる。

「んで、随分勿体ぶってくれたが、この『ふたこぶラクダ』は、どういう事だ？」

鬼村がそう表現して指差したのは、沙希のクリトリスだった。

そこには本来、包皮で包まれているはずの小粒のそれが、小豆が貼り付いているかのように堂々と存在を主張している。

色も術後すぐのせいだろうか、普段の薄ピンク色ではなく、まさに小豆のように赤黒く、そして小指大に膨らんでいる。

これだけでも、１５歳の少女の股間としては、十分に異常と言えるだろう。

「ふたこぶラクダ・・・？

ああ、ここですね。これもクリトリスですよ！」

春日の言う、そして鬼村の指差す「これ」は、沙希の剥き出しになったクリトリスの、その上に存在するコブだった。

それは沙希の紅黒く腫れた陰核と異なり、青白く艶めいていた。

<.i833802—434402>

「一応、陰核包皮の除去となっていたので、胎内に埋まっている部分も露出したのですが・・・」

「つまり・・・、クリを根元から引きずり出した、ということか？」

春日は「ええ、まぁ」と、鬼村の質問に肯定する。

「いや、包皮切除ってだけしか描いてなかったので、どう解釈して

いいか・・・悩んじゃって」

春日は気まずそうにポリポリと頭をかく。

「で、クリトリスの上を切開して、埋没部分を引っ張り出したってわけか・・・」

３１　悪夢の奴隷装飾⑦【ピアス：性器改造（陰核包皮除去：陰核茎部露出）】

陰核とは、よく女性のペ○スと表現されることがある。
これはあながち間違っておらず、実際に男性器の名残りとも言われる。

一般にクリトリスは「陰核亀頭」と言われる、男性器の亀頭に相当する性器である。
ただし、そこに這わされた神経は男性器のそれと比べて数十倍とも数百倍とも言われる。

つまり、刺激を受ける量も相応に、男性のそれより大きい。

その為、普段は陰核包皮と言われる皮を被った状態で、その刺激から守られている訳だが・・・。

「彼女のクリトリスの包皮の除去・・・については限界まで切除しました」

春日は沙希の恥丘・・・別称「ビーナスの丘」に手を添えると、クリトリスがよく見えるように親指を押す。

「・・・が、胎内深い部分が癒着部分が多くて、下手するとクリトリスそのものを切除してしまうリスクもあってですね・・・」

沙希のクリトリスは、その刺激の防御壁とも言える包皮が除去されており、剥き出しの状態だった。

が、目を引くのは、そこではない。
その上に存在するもうひとつの、本来なら存在するはずの無いクリトリスだ。
「結果、亀頭部分と『茎』の部分を分けて露出させとりあえず引っ張りました」
上の青白いクリトリスの正体は、つまり沙希の胎内に納まっているはずの、茎の部分だという。
「で、この二箇所に分かれた陰核ですが、固定を兼ねてピアスで繋げてます。これは念の為に千切れたりしない為の処置で・・・」
見ると、沙希の二つのクリトリスは一本のピアスで貫かれ、串団子のように固定されている。
「・・・ふぅん」
鬼村は素っ気ない返事をするが、声の抑揚や目の輝きが、先刻と明らかに異なる。
「え・・・と、それで、ですね・・・」
春日が説明を続けようと言葉を発したとき、それを遮るかにように、背の高い男が会話に入ってくる。
「どしたの、鬼村サン。もう下級生は酔い潰れちゃったし、アンタもトイレかと思ったら・・・」
稲村は陽気に喋りながら部屋に入ってくる。

もともと飄々とした男だが、アルコールで少しその性格に拍車がかかっているのだろうか？

「おう、稲村。悪いな、いま戻るわ・・・」

そう言うと、鬼村は部屋を後にする。
鬼村と入れ替わるように、稲村が部屋に入り、沙希の状況を確認する。

「おおう、これ、本当に沙希ちゃん？」

舐めるように沙希の身体を観察する稲村に、鬼村は振り返らずに声を掛ける。

「稲村ァ、悪いが春日サンの説明を代わりに、聞いといてくれや。お前から説明を聞くほうが分かりイイんで・・・」

稲村は笑顔で「オッケ」と、親指を立てる。
鬼村はそれを見ることなく、階下の宴会場へと進んでいった。

◇◇◇

「ふーん、いろいろやったねー、春日さん。けっこー楽しんでたんじゃない？」

稲村ぬ、春日は「いや、いや・・・」と手を降って、顔にシワを寄せた笑顔というか、苦笑した表情で否定する。

「んで、このダブルクリトリスについては、どうなん？」

「え、ど、どうなん・・・と言うと、さっきの説明の通り・・・え？」

稲村の質問に春日はキョトンと返す。

「つまりさ、この上のクリトリスについては、要は・・・チ〇コで例えると、陰茎の皮を剥がした状態なわけじゃん？」

沙希の股間にある2つの突起を指し、稲村は自分の股間に指を当てて説明する。

「流石に俺でも、死ねるわ。風が吹いただけで、もう悶絶よ？」

その指摘に、春日はハッとなった様子で、慌てて説明する。

「え、あ・・・いや、大丈夫なんです！麻酔は、いや麻酔をかけてまして、あ、あの・・・」

稲村は「はぁ？」という表情をするも、その表情を笑顔に戻し、春日に顔を向ける。

「あー、麻酔効いてるんだ、そか、そか。なら大丈夫だね」

「は、はは・・・大丈夫です・・・よ？」

パァン！

稲村は笑顔のまま、春日を平手で叩いた。
状況を飲み込めず、目を白黒させる。

「春日サン、問題文はチャンと意図を理解してね。これは体で覚えとこう」

春日は鼻から血を垂らし、「す、すみません・・・」と動揺する。

「んでさ、麻酔が切れたら、これどうなるん？」

「そ、それは・・・資料が不十分で、なんというか分からない的な・・・」

言いかけて、春日はハッとなり、慌てて言い繕う。

「いえ、ま、麻酔が切れると、恐らく剥き出しの神経に直接刺激を受けるのは、痛み・・・いや、痛覚より、性感帯に散らばる快楽神経が・・・」

「ひと言で言うと？」

春日は少し天を見上げ、答えをまとめる。

「歯の神経を直接触られるくらいの刺激が、膣から腰から下半身全体に掛かってきます」

稲村は「おおーう」と、感嘆の声を上げる。

「じゃ、格闘技はおろか、日常生活も無理だね・・・」

「で、ですよね・・・はは・・・」

稲村は、今度は優しくペチペチと、春日の頬を優しくはたく。

「これはこれで面白いから、ＯＫね。ただし、大至急で対策は用意しておいてね」

二人は引きつった笑顔で沙希のソコを見つめると、第２のクリトリスはそれに答えるようにピクピクとうごめいていた。

３２　悪夢の奴隷装飾⑧【ピアス：性器改造（陰核包皮除去：陰核茎部露出）】

草薙と加藤の、二人の屈強な男に掲げられるように抱えられた沙希は、女性の大事な部分を晒すような大開脚の姿勢となっていた。
まるで赤ちゃんがオシッコをしーしーするような姿勢は、１５歳の少女にとって屈辱でしかない。
だが、その秘所は赤ちゃんのそれでなく、それどころか同じ年代の少女達より遥かに淫猥に彩られている。
「で、上から『舌』『乳首』『ヘソ』『淫紋』と説明を終え、いよいよオマ〇コの改造の説明です！」
ヘラヘラと笑いながら実況する稲村は、実況のクライマックスにやや興奮し、額に浮かび上がる汗を腕で拭う。
「これらの施術はドクターKこと医大１０浪正の春日サンの最高傑作とのこと！」
稲村が説明する通り、沙希のオマ〇コは女子高生に相応しくない、卑猥な改造が施されている。
（こ、これが・・・本当に私の、身体なの・・・？）
鏡面に映し出される自分の姿を、沙希は直視できなかった。
特にその秘部は、ラビアに４つのピアス、そして陰核に縦に貫くピ

アスが刺さっている。
それだけでも異様なのに、さらにそこには２つのクリトリスが鎮座している。
「世界初！クリトリスを２つ持つ少女！！」
稲村が高らかに叫ぶと、長井は大きく歓声を上げ、場を盛り上げる
鬼村もビールを新しく手に取ると、カシュッと小気味よい音を立てて、グビグビ飲み始める。
「さて、さて。ドクターＫは何を勘違いしたのか、クリトリスの包皮切除を、本当に完全に剥き出しにすると解釈しました」
稲村の解説が乗りに乗る一方で、沙希は青ざめた顔を一層、青ざめる。
「か、完全に剥き出し・・・て、どういう・・・」
沙希はゴクリとつばを飲み、言葉を止める。
もともと舌ピアスのせいで唾液が過剰に分泌されているせいもあるが、恐怖と緊張による部分も大きいだろう。
「ほらほら、沙希ちゃん。鏡を見て。加藤、草薙、もうちょっと前に出て、オマ〇コをクローズアップ！」
稲村の命令に、二人はヨタヨタと前進する。
姿見鏡に近付いた分だけ、沙希のそこは大きく拡大される。

一方で長井と鬼村は正面が見えづらくなる。

「あー・・・沙希の背中が普通すぎて寂しいな」

長井は沙希の背中を見て、誰に言うでもなく呟く。
一方で沙希はというと、拡大された自身の女性器を見て、絶句する。

（こ、この白い塊が、私の・・・）

血管の浮いた神経のコブを見て、沙希は暗がりで感じた違和感の正体を理解する。

「ドクターKの計画では、クリを全部引っ張り出して1本の長クリにする予定だったけど、まぁそこは10浪ドクターの哀しいとこ」

稲村は解説を止めることなく、加藤と草薙の肩を軽く引っ張って長井たちに沙希が正面を向くように誘導する。

「とりあえず上だけ切開して、陰茎部を引っ張り出したということで、こんな無様なダブルクリトリスが完成したわけです！」

稲村は言い終えると、沙希のクリトリスを、ピンッ、ピンッと二つ、中指で弾く。

「ぎゃひぃー！」

その瞬間、沙希は普段の可愛らしい悲鳴とは程遠い絶叫を上げる。

稲村に神経瘤のような陰核を弾かれた瞬間、下半身が腰から取り外

されたような不思議な感覚が沙希を襲う。

そこからコンマ数秒で、陰核が脳に電気ショックを流すような、いや、落雷が落とされたような感覚が支配する。

「このように、ちょっとの刺激で・・・て、うわ、暴れるな！」

沙希は暴れるというよりは、激しい痙攣のようにビク、ビクンと派手な動きをし、自分でも制御出来ない状態に陥っている。

「ちょっ水野、危ない！」

草薙が叫ぶも、バランスを崩したことに加え、泥酔で足元もおぼつかない二人は無様にも沙希を抱えたままひっくり返る。

ガッシャーン！

「あーらら、沙希ちゃん、大丈夫？」

稲村が少し心配そうに、しかし笑顔を崩さずにそう声がける。

「あ・・・あ、あが・・・」

沙希は白目を剥き、手で股間を隠すような姿勢でヒクヒクと痙攣している。

その口からは泡のような涎で溢れ、同じ様に下の口も、ビュッ、ビュッと愛液が吹き出す。

３３　最後の選択肢

（こ、腰から下が、痺れて動かない・・・）

稲村に「第２のクリトリス」、すなわち陰核の根元の剥き出しになった神経の瘤を強く弾かれた沙希は、強烈な刺激に気絶寸前まで追い込まれた。

何とか気力を取り戻すも、下半身に力が入らず、それはまるで腰から下がプラモデルのようにパカッと外されているような感覚だった。

「はは、沙希ちゃん。麻酔が切れちゃったようだね」

稲村がしゃがみ込み、沙希を覗き込むような姿勢で語りかける。

「ま、麻酔・・・て、どういう意味です・・・か？」

沙希はせいぜいと息をしながら、稲村に聞き返す。

「だからさぁ、沙希ちゃんのクリは、もう神経から剥き出しになってるわけ」

稲村は、そう言いながら沙希の足を引っ張り、オマ◯コが見えるように開脚させる。

（や、やだ・・・脚の感覚が、まだ）

沙希は足の力が入らず、稲村のなすがままにされてしまう。

「クリって快楽神経が密集してるから、ちょっと触れただけでスタンガン打たれたのと一緒なのよ」

稲村が人差し指を沙希の敏感な突起に伸ばす。

「ひっ・・・、やめ・・・」

ビクッと怯える沙希。
稲村は触れるか触れないかの位置で指をプラプラと動かし、沙希の反応を楽しむ。

「なあ稲村・・・」

稲村は不意な声がけに振り向くと、鬼村がすぐ横まで来ていることに気付く。

「けっきょくそれ、どうすんだ？春日さんは何か言ってたか？」

稲村は肩をすくめ、洋画のキャラクターのような大きめのアクションで首をふる。

「一応、ドクターKには圧かけといたよ。ひと眠りしたら、対策を考えるでしょ」

「ギャッハハハ、無様だなぁ、沙希！」

大声で笑い転げるのは、長井だ。
稲村も静かに笑いが、長井の反応に若干引き気味なのか、表情は引きつっている。

それに対して鬼村の反応は微妙だ。
と、言うより何を考えているのか表情から読み取れない。

「なあ、沙希。もうお前は格闘は無理だ・・・」

鬼村は沙希を真っ直ぐ見つめると、静かに言い放つ。

長井も稲村も、雰囲気がガラリと変わったことに気付き、どう反応してよいか分からず、動きが止まる。
当然、沙希も時間が止まったようになる。

「・・・どうよ、沙希。夢も希望も崩れた気分は？」

鬼村はしゃがみ込みと、淡々と沙希に語り始める。

「もう知ってるだろうが、俺はチ◯コが勃たない体だ」

「・・・えっ！」

鬼村の告白に、沙希は衝撃を受けた。
いや、驚いたのは沙希だけじゃない。長井も稲村もだ。
加藤と草薙はひっくり返ったまま動いていない。恐らく泥酔状態で意識を失っているのだろう。

（そういえば、この人は私を直接犯したことは、一度も無い・・・）

確かに言われれば思い当たるフシがあると、沙希は戸惑いつつも納得した。
対して、長井と稲村の驚きは沙希とは別のものだった。

「鬼村・・・、なんで今、そんな話を？」

長井の問いに、鬼村はフッと鼻で寂しげに笑い、沙希に話を続ける。

「俺はお前が入学したての頃、野心に燃えギラギラしてるのを見て、ちょっとだけ、勃起したんだよ・・・

ずっと反応が無かった俺のチ〇コが、あんとき一瞬だったが、明らかに反応した。

だが、その一瞬だけだった・・・

俺はその時、理解したよ。お前の中にある、何かを引きずり出したとき、俺のインポも治るってな・・・」

「そ、そんな、身勝手な理由で・・・」

沙希はワナワナと震えるも、鬼村は気にせず語り続ける。

「だからお前を砕いてやったのさ。もっと俺に牙を剥くように」

その結果が、これだと言うのだろうか？

（あ、あまりにも、酷過ぎる・・・）

鬼村の言う通り、もはや沙希は拳法どころか、普通に歩くだけで悶絶してしまうだろう。

乳首のピアスは擦れ、ラビアのピアスは左右に振られ、包皮の除かれた陰核は常に勃起し続ける・・・

（わたしは、今やそんな淫乱な身体に変えられてる・・・）

現実に沙希は目を潤ませるが、鬼村には沙希に対する同情や憐れみの感情は汲み取れない。

「だが、今のお前にそういったギラギラした牙が感じられねぇ。媚びたウサギの目だ」

鬼村は沙希の顔に、鼻と鼻がくっつくほど顔を寄せ、こう言い放つ。

「もうお前に興味ねぇわ・・・」

しばし沈黙が流れる。

「お、おい鬼村、もう沙希はいらねーってことかよ？」

沈黙を破ったのは長井だった。

鬼村のひと言は、沙希の解放を意味していた。

稲村と長井は渋る表情を見せるも、まあいいかと言った様子を見せる。

彼らにとって、沙希の存在などその程度ということだったのだろう。

「てなわけで、沙希。こう言うんだ。『ワタシは格闘も夢も未来も、全てを諦めて惨めで淫乱なメス犬として生きていきます』と」

鬼村は悪意に満ちた表情で、沙希にそう命令する。

「言えば、お前は解放だ・・・」

沙希は突き付けられた言葉に、息を飲んだ

（言えば、すべて終わり・・・？）

沙希は言葉を頭の中で反芻し、それが如何に屈辱的で侮蔑と悪意に満ちたものと、改めて怒りがこみ上げる。

しかし、たかが言葉だ。

劇団員が台本通りの台詞を言うことで、その人物の品位が下がるわけではない。

（今までだって、言葉に出来ない恥辱を味わってきた、今更・・・）

沙希の頭に、選択肢が現れる。

選択肢「この台詞を言いますか？」

▶　言う

　言わない

選択肢「この台詞を言いますか？」

　言う

▶　言わない

選択肢「この台詞を言いますか？」

▶　言わない

34　沙希の心は砕けない【最終話】

バァンッ！

沙希の平手は派手な音を立て、鬼村の頬を打ち据える。

「ふ・・・ふざけないで！誰が！あなた達なんかに屈伏するものですか！」

涙を浮かべ、沙希は興奮してそう言い放つ。

稲村は「へぇ」と笑みを浮かべ、長井も「ふうん」と、様子を見ている。

この反応に鬼村がどうするのか、二人の興味はそこに移っていた。

「・・・沙希」

鬼村はワナワナと肩を震わせ、不気味な笑みを浮かべる。

「沙希、沙希、さき、サキ、サァキー！」

名前を連呼して直立する。

直立したのは二本の足だけではない、股間のソレは、立派なテントを張っている。

「やっぱりなぁ！その目が決め手だったんだよ！怒りと闘志、もっ

と俺に向けるんだよ！」

冷静な鬼村が狂乱している。

その異常な光景に沙希は戸惑う。　稲村と長井もそうだ。

「オラァ！憎めよ、俺に牙を剥き出して来いよ！俺を完全復活させて見ろ！」

鬼村はベルトを取り、その天を穿つように勃起したペ〇スを沙希に見せつける。

「股、開けやぁ！」

沙希に襲いかかる鬼村に、沙希は思わず「ひっ！」と悲鳴を上げる。

その瞬間、鬼村の表情はいつもの冷静な無表情に変わり、股間のそれも風船が萎むように頼りない姿になる。

「・・・んだよ、それ？」

萎えた鬼村は、ズボンだけ直して出掛けようとする。

「おい、鬼村、どこ行くんだ？」

「飲み直し・・・いや、もう朝だ。コーヒー・・・」

鬼村と長井は、沙希を残してアパートを出る。

「稲村、お前は来ないのか？」

長井の呼びかけに、稲村は飄々と肩を竦める。
「そりゃ、このまま出掛ける訳にもいかないでしょ？」
稲村は、沙希ではなく、ひっくり返った二人の後輩を一瞥する。
「ああ、確かにこいつら、ちーと弛んでるな」
長井の言葉に、稲村は「でしょ？」とウインクする。
「鬼村ちゃん、沙希ちゃん含めて、今後の方針は俺に進めさせて貰っていい？」
鬼村は稲村の提案に、無言で手をヒラヒラさせる。

◇
◇
◇

鬼村と長井が出て、まだ数分も経っていない食堂は、馬鹿騒ぎしていたとは思えない静寂に包まれる。
「さて、沙希ちゃん。キミは解放のチャンスを棒に振った。つまりこれからもヨロシクってことだ」
稲村は優しく、いや甘ったるい口調でそう言うと、沙希の乳首のリングをピン、ピンと突いて弄る。
「あんっ！」
沙希は一瞬、甘い声を出す。
だが直ぐに気を入れ直し、稲村の手をバシンと払い除ける。

「嫌です！もう誰の言いなりにも、なりません！」

「ふぅん・・・」

稲村は素早く沙希の股間に手を伸ばす。

「あ・・・、やめっ！」

その早すぎる動きは、沙希が反応するより先に、彼女の陰核の上、最も敏感な箇所を的確に捉える。

「ぎゃひぃー！」

稲村は、触れるだけで強烈な電気の走る沙希の神経瘤を、形がひしゃげるほど強く摘む。

「鬼村ちゃん引っ叩いて、調子に乗っちゃったんだね。ダメだよ、沙希ちゃん」

白目を剥いて泡を吹く沙希。
下半身だけは、打ち上げられた魚のようにビクビクとしていた。

「さーて、沙希ちゃんの再教育メニューを考えないと・・・」

稲村は嬉しそうに一人嘯く。

格闘少女、水野沙希の奴隷調教は、ここから本格的に始まるのだった・・・

３４　残ったものは奴隷の刻印【最終話】

選択肢　このセリフを
▶「言う」

沙希は、ゆっくりと、唇をワナワナと震わせながら、屈辱的なセリフを口にする。

◇◇◇

悪夢の奴隷調教の日々から解放され、１ヶ月が過ぎようとしていた。

あの日の翌日、鬼村と長井は学校に来なくなった。
もともと素行の悪かったので、誰もそれを不思議と思うことは無かった。

噂では、喧嘩して少年院に入ったとされている。

加藤は何度か声をかけて来たが、沙希の拒絶にそれ以上、ちょっかいを出すことは無くなった。

後で知ったが、どうやら草薙が加藤を諭したとのことだ。
草薙は根は真面目だったので、これを機に更生する腹づもりのようだ。

こうして、沙希の日常は戻った。

（退屈・・・）

だが、沙希の表情は虚ろいでいた。

あの日、あのセリフを吐いたことで、沙希は全てを失った。

夢も、闘志も、大好きだった格闘の道も。

残ったのは、身体中に施されたピアスだけだ。

だから、今の沙希は空っぽだ。そう沙希は思っていた。

「普通って、そんなもんでしょ？」

沙希の親友である栞里（しおり）は、そう声を掛ける。

栞里（しおり）は沙希に何があったのか知らないし、詮索するつもりも無い。

ただ、親友が何か悩んでいるなら、側に居てあげようと、そう思っていた。

「午後の体育の授業、どうする？」

栞里が聞くと、沙希は少し考える。

「そうだね、ずっと休んでいる訳にも行かないし、今日は大丈夫そうだから・・・」

そう言うと、沙希は体操服を持って、トイレに行く。

栞里はそれを、何も言わず黙って見送る。

彼女の態度から、きっと裸を見られたくない事情が出来たと、そう

理解していた。

沙希はトイレに入ると、制服を脱ぎ、体操服に着替える。

ブラジャーを外すと、乳首のピアスがチャラチャラと怪しく輝く。

沙希はそのピアスの上から絆創膏を貼ると、しっかり固定されて動かないことを確認する。

次にお腹に巻かれた状態を巻き直す。ヘソのピアスが一瞬光るも、すぐに包帯に隠される。

（下は・・・このままでも、大丈夫かな？）

沙希は自分の陰部をそっと弄る。

「んっ・・・・」

沙希は歯が沁みるような感覚を下腹部に走るのを感じ、とっさに指を離す。

そして、指を口に咥えると、歯型がつくほどきゅっと噛みつく。

「・・・・・っ、くぅ～っ！」

沙希は悲鳴を上げたくなるのをなんとか堪え、呼吸を整える。

「はぁ、はぁ・・・、やっぱ、直さないと」

沙希は下着を脱ぐと、そこに貼り付いた大きめの絆創膏を、ゆっくり剥がす。

ぬちゃっ・・・

絆創膏はさほど抵抗もなく、簡単に皮膚から剥がれ、隠された部位が露わになる。

そこには、かつて連中によって引きずり出された、クリトリス根本の神経瘤が青白い艶を放っていた。

「・・・だいぶ、良くはなって来てるけど」

沙希の神経瘤はその表面に薄い膜が再生され、刺激が幾ばくかは軽減されていた。

だが、所詮は気休め程度だ。
軽く触れるだけで、スタンガンを撃たれたような強烈な刺激は未だに慣れることはない。

だから、沙希は朝、目が覚めて最初にする事は、この忌まわしい二つの陰核の手入れからだった。

「やっぱり、運動は無理かな・・・」

でも、今日は軽い運動と聞いているし、最悪で見学するだけでも、と、沙希は貼り直した絆創膏が動かないか確認し、ゆっくり体操服に身を包む。

◇◇◇

「ふぅん、沙希ちゃん。すっかり『普通』の女子高生になっちゃったねー」

屋上からグラウンドを眺める長身の男は、沙希の姿を捉えると、ひとり呟く。

「もう暫くは、青春を満喫するといい・・・」

クックックと含み笑いをすると、男はスマホの映像を再生する。

沙希の痴態が小さなスマホに映し出されると、男はポケットに手を入れ、モゾモゾ動かす。

青く澄んだ空に、稲村の高笑いが不気味に響いていた。

あとがきと次回予告　★

ひとまず完結となります。

本能のままに書きなぐった作品ですが、お付き合い頂いた皆様のお陰で、荒削りながらも完結させることが出来ました。

読んで頂いた皆様が居なければ、とうに投げ出していたと思います。

個人的にはピアスやら陰核包皮除去やら、そういう肉体改造された女の子が普通の生活を送れるのかって部分を掘下げたいので、いずれ第二部を本能のまま書き殴りたいと思ってます。

＜ｉ８４４０９６｜４３４０２＞

今回を期にエロ小説を書くことの面白さに目覚め、次回作品も執筆したいと思ってます。
ある程度の構想もまとまったので、近々、公開できるようにしたいと思ってます。

＜ｉ８４４０９７｜４３４０２＞

またお付き合い頂ければ幸いです。

Ｅｘ０１　その後の日常【３Ｐ：膣に蛇：アナルに蛇：騎乗位】

★（前書き）

最後の選択で、新生空手部の連中と縁が切れなかった世界線のひとコマです。

★Ｅｘ０１　その後の日常【３Ｐ：膣に蛇：アナルに蛇：騎乗位】

沙希が目を覚ますと、そこはキッチンのテーブルの上だった。

<:i855845―43402>

（そうか・・・また、ここで気絶したんだっけ・・・）

周囲を見渡すと、人影は無い。どうやら沙希を凌辱していた男たちは、彼女を放置して出かけて行ったらしい。

沙希は重い体を起こして、机の縁に腰を降ろす。そして小さな両脚を開くと、その秘唇に深く潜り込んだ「何か」を引きずり出す。

ズズズ・・・

（ん・・・ひぐっ・・・）

へその上の位置まで押し込まれていたのは、蛇を模したゴムの人形だった。

<:i85856―43402>

ぬぽんっ！

勢いよく引き出されるそれは、まるで生きているようにテーブルの上から落ちる。落ちた際にニュチャッっと粘液を飛び散らせる。

沙希は腹部から下にかけての膨満感から解放され、なんともスッキ

りした開放感に、大きく息を吐く。すると、時間差でヘビが通った際のウロコのデコボコが沙希の膣壁や子宮口、陰唇に至るあらゆる性感へ刺激を与え、それはあたかも足のしびれの如くビリビリとした電撃となって、沙希の下半身全体に襲い掛かった。

その悪魔のような刺激に沙希は耐えきれず、ビュービューと潮を吹いて、ビクビクと連続で絶頂を迎える。

（床の下も愛液でびしゃびしゃ・・・また、あいつらが帰る前に掃除しないと・・・）

◇◇◇◇

昨夜の「訓練」は、苦手なヘビを克服する精神訓練という名目だった。いや実のところ沙希はヘビに対してさほど嫌悪感は持っていなかったのだが、彼らの思いこみがあったようだ。

「いいんだよ！とにかく用意したんだから、やれ！！」と命令されると、沙希は従うほかに選択肢は無い。嫌がる演技をさせるか彼らは揉めていたが、けっきょく演技は興ざめと結論に達し、沙希は普通に彼らの指示に従っての訓練となった。

まずオナニーで絶頂くまで１０回、そのヘビを使って行わされる。

＜．ｉ８５６８２―４３４０２＞

１０回の絶頂に達すると、今度はアナルにヘビの人形を奥深く・・・Ｓ字結腸に届くまで飲み込ませ、寝そべる男達に騎乗位での奉仕を行う。

＜．ｉ８５６６８３―４３４０２＞

男とは、加藤と草薙のふたりだ。
彼らは仰向けに倒れ、お互いの足をお互いの肩に乗せてスタンバイする。その様はまるで左右対称で中央に男根を二本携えた生物のように見える。

（穴ひとつで男二人を同時に満足させる方法・・・）

沙希の後穴にはヘビがＳ字結腸深くまで潜んでおり、男根のヘビを飲み込む余裕はない。つまり、前の淫穴ひとつを使って、男二人を同時に満足させるのだ。
そして、沙希はその方法をすでに習っている。教えたのは加藤と草薙だ。

（なら当然、あの時と同じやり方※で、やらないといけないよね・・・）
※ｅｐ．７　お風呂で奉仕プレイ③　参照

すでにジュクジュクに濡れた沙希の秘部は、容易に草薙のペ○スを飲み込む。奥まで飲み込むと、彼の性器の付け根と、彼女の包皮を取り去った剥き出しのクリトリスがぶつかる。

<ｉ８５６６７９－４３４０２>

沙希にはクリトリスの上にもう一つ、クリトリスが存在する。その正体は皮膚の下から引きずり出された、陰核の根本の部分である。特殊な薬品を塗り込んでいるため、現在は感覚を鈍らせて刺激に耐えられるようにされている。もちろん日常生活が満足に行えるかと言うと、むしろ下のクリトリスより強く感じる、非常に困った状態ではあるのだが。

とにかく、今の沙希の状態ならセックスをする分には十二分に問題ない。

沙希は草薙のペニスを根本まで飲み込むと、一気に腰を浮かせて引き抜く。だが、完全に引き抜かずに亀頭だけ沙希の胎内に納めたままだ。沙希は勢いで抜けないように、絶妙に膣口を締めて暴れる亀頭を抑え込む。
これだけで、普通の男児なら睾丸の貯蔵物は彼女に全て捧げることになるだろうが、草薙と加藤はセックス慣れと持ち前の気合いで踏ん張れる。彼らの気持ちをひと言で例えるなら「三こすりどころか、一こすりで絶頂く訳には、いかないんだよ！」と言ったところだろうか。

草薙は沙希に愛液を塗り込まれた陰茎が、外気に触れてヒヤリと感じる。それに対して亀頭はバターも溶けそうな絶妙な温度と締め付けが、カリ首からペ〇スを引き抜かれそうな快楽を与える。
沙希はそんな草薙に余韻と余裕を与えまいと、再び一気に根本までペ〇スを飲み込む。すると冷えた陰茎が熱い淫肉に包まれて火傷をしそうになる。

再び沙希が大きく腰を上げると、今度は亀頭で止まらず、草薙のペ〇スは全身が沙希の胎内から吐き出される。飲み込まれる前と比べ、草薙のペ〇スは肥大化、血管の増加、そして湯気が立つように赤々と熱気を持ち、今にも精を吐き出さん雰囲気だ。
沙希は草薙のペ〇スを抜き出すと、今度は加藤のペ〇スに向けて、獲物を狙うヘビの如く根本まで加藤のペ〇スを飲み込む。加藤のペ〇スは草薙のそれと比べて、僅かに短い。その為、沙希は勢い余って加藤のペ〇スを吐き出すのを亀頭で止めそこなってしまいそうに

なる。
だが、加藤のペ○スは沙希のオマ○コから抜けてはいない。亀頭で膣口を締めているため、加藤のペ○スを亀頭で思い切り引っ張ったのだ。加藤は「痛い！」と思う暇も与えられず、亀頭の締め付けを解放され、逆に陰茎を根本まで締め付けられる。

ヌポッと加藤のペ○スが沙希のオマ○コから完全に抜かれると、やはり草薙と同様に加藤のペ○スは肥大、血管増幅、痙攣といった症状を持って外気に晒されるのだ。

そして、草薙のペ○スがビクビクと痙攣しながらも射精しないよう踏ん張っていると、その熱気が収まる前に沙希の淫唇はクパっと大きく開き、そのペ○スを一気に頬張るのだ。

沙希は沙希で、いつも以上に強く感じていた。事前に１０回のオナニーで達しているにも関わらず、だ。
その理由は直腸内を侵略しているヘビの人形の存在だ。蛇行したその玩具は、ペ○スを出し入れすることでグニグニと腸内を蠢くため、既に１０回絶頂に達した性感は、あっさりと１１回目に達する。だが、腰全体が絶頂における痙攣現象を起こしても、その強靭な足腰は彼らのペ○スを飲み込むピストン運動を止めることなく、連続で出し入れを繰り返す。

＜ｉ８５６８１―４３４０２＞

もはや沙希は機械と化していた。
決められた動作を精巧に繰り返す、まるで時計職人にでも作られた性交人形（セクサドール）のようだ。

草薙は3回目のピストンで、亀頭をキュッと噛みつかれた時に1回

目の放精を行っている。だが若さか沙希の技術のせいか、それで萎える事無く草薙のペ〇スはギンギンに直立する。加藤も３回目のピストンの際に絶頂に達するが、彼は亀頭ではなく、そこからの根本まで飲み込まれた際に子宮口で尿道をキスされたタイミングだ。

だが、沙希は壊れた玩具のように、この繰り返し動作を止めない。止めるタイミングは沙希が決めてよいのでは無いからだ。

＜ｉ８５６８０―４３４０２＞

一度射精することで、草薙と加藤の決壊は完全に崩れ、あとは本能のまま、どぴゅどぴゅと放出するのだ。だが、流石に３回目の精子を吐き出した段階で、加藤と草薙は限界が訪れる。だが、萎えたのを沙希にバレたくない。そう思った加藤は、沙希の肛門からちらりと見える、ヘビのしっぽを素早く掴む。

ジュボボボボボッ！

＜ｉ８５６８４３―４３４０２＞

加藤が引き抜く力に沙希が腰を上げる力が加わったことで、その摩擦は沙希の肛門に火をつけかねない勢いとなる。沙希が悲鳴を上げると、まず沙希の秘唇がガパッと開き、舌を出しておう吐するかのように、膣壁がめくれて子宮口が飛び出し、白濁液をゴポゴポと噴出する。

肛門はもっと酷い。腸が完全にめくれ上がり、飛び出している。いわゆる脱肛という状態だ。
そして、沙希はそのまま草薙に抱き着くように、ふっと力を失って倒れこんだのだった。

◇◇◇◇◇

その後の記憶が無い所を見ると、どうやらそのまま彼らは沙希を解放して、出かけたのだろう。見ると子宮口は元の位置に戻されており、肛門も胎内に納まっているようだ。

（ヘビまでお腹に戻すこと、なかったのに・・・）

また、二つ目のクリトリスも表面に薄いコーティングが施されており、強烈な刺激から守られている。
おそらく連中から「ドクターK」と呼ばれている、春日という男が施したのだろう。彼は優れた外科医の卵だそうだが、弱みを握られているようで連中の言いなりとなってるように見える。

沙希のクリトリスを2つにしたのもドクターKなら、刺激から守る軟膏を調合したのもドクターKだった。軟膏は改良に改良を重ねているようだが、最初の頃は塗っただけで唐辛子を塗ったような高刺激に半日悩まされたり、クリームが途中で流れた時は、体育の授業中ということもあり、運悪くボールが股間に当たり悶絶したこともある。

その末に辿り着いたのが、現在の表面をコーティングする処置だ。
いつもは沙希が毎朝、軟膏状のクリームを塗って、陽光に当てて硬化させる必要がある。これをすると半日は、水に濡れても熱しても落ちることは無く、逆に半日経つとコーティングが劣化して、水で容易に落ちるのだ。

（また、改良されてるみたい・・・）

１５歳の少女の女性器・・・増して陰核亀頭に寝ている間に何かをされる屈辱もあったが、それ以上に「意識を失っているうちに処置してもらっていた」という事実に、沙希は素直に喜んだ。

何せ、剥き出しの神経瘤である第二クリトリスは、触るだけで気絶しそうな鈍痛を伴うのだ。例えるなら、虫歯の治療で歯の神経をコリコリされる感覚だろうか・・・。

だが、その作業をしておかないと、沙希は日常生活もままならない。いや、その日常も連中のせいで、既に異常なものとなっているのだが。特にこのアパートでは、沙希は衣類の着用を許されず、やって良いとされる行為はアパートの掃除や家事、そしてＳＥＸとオナニーだ。

（なんで・・・こんなことになっちゃったんだろうな・・・）

沙希は愛液と精液でびしゃびしゃの床を拭きながら、そう呟く。気が付けば正午だ。今日も学校をさぼってしまったと、少し後悔する。いや正しくは、気絶していたので学校に行けなかったのだが。

（午後からでも、行かないと・・・ここに居ると、あいつらが戻ってくる・・・）

沙希の予想は正しかった。だが、行動が少し遅かった。

「よぉ、沙希ちゃん！目が覚めたか・・・て、まだ床が粘液まみれじゃない！」

戻ってきたのは稲村、加藤、草薙の三人だ。リーダーと副リーダーはパチンコだと言う。

「さて、沙希ちゃんはヘビは平気だったので、別のモノを持ってきたよ」

そう言うと、加藤と草薙は、バケツリレーの要領で大きなアクリルケースを持ち運ぶ。その中身は、ギチギチに詰められたミミズだった。

「さすがにミミズは苦手だろ？これ使って、精神訓練を再開するよ！膣にも肛門にも子宮にも、たっぷり詰め込んであげるからね！これだけあれば、ミミズ風呂ってのもオツなもんだよ」

・・・その日の午後は、浴室から沙希の悲鳴が鳴りやまなかった。